

都市財政構造分析続論 (2)

——西高東低型構造解明——

西村 紀三郎

目 次

- 5 都市歳出の状況展開
 - (1) 目的別歳出の推移概観
 - (A) 社会関係費の増大と東西格差の持続
 - (B) 産業関係費の平準化傾向
 - (C) 土木費の増加停滞と東西関係転換
 - (D) 教育費の東高西低関係の持続
 - (2) 性質別歳出の推移概観
 - (A) 人件費の増大と東西格差の保持
 - (B) 扶助費の増加停滞と東西格差の増大
 - (C) 補助費等の増大と東高条件の定着
 - (D) 普通建設事業費の東西関係逆転
 - (E) 普通建設補助事業費の西高条件持続

5 都市歳出の状況展開

(1) 目的別歳出の推移概観

都市歳入の主要項目に示された状況展開に対応する都市歳出の状況を把握する段取りとなったが、その解明に当って、常識的な順序で目的別分類に即した主要費目について概観し、次いで性質別分類に合わせた把握をする。ここでも細目の状況理解は後に回す。視点は収入各項の解明の際と同じ東西格差の状況理解を軸に置く。

既述のように昭和47年度以降の都市財政の展開では、その総額の急増にもかかわらず、歳出構成の比率は公債費の増大だけが目立って、他の費用については特に大きな差異はない。あえて補足するならば50年台後半で教育費の比率が低下したことであろう（既出第29表）。しかし、この構成比率の状況推移が50年台前半までの経費急増後の増加停滞の下での条件であったことを念頭に、その展開に対応した各経費の東西関係に視点の基本を置きつつ、地域状況の理解を加えたい。ここでも住民一人当りの額を対象とした把握を進める。そして47年度以降3年度ごとで大局の推移をとらえ、その状況に合わせて最近時の理解を強めるために毎年度について見ることにする。

(A) 社会関係費の増大と東西格差の持続

民生費、衛生費、労働費の合計を社会関係費とみなしてその状況を見る。都市総体の住民一人当り額では昭和47年度の1万5,067円から56年度の5万8,226円まで3.86倍した後は増大テンポを弱めて、62年度の6万8,744円へとわずか18%増に止まった。

この増加過程で特別区、大都市、一般都市の支出水準の差を見ると、一般都市を基準としたとき、特別区は低く大都市は高いという47年度の条件であったのが、大都市は高位を保持したのに対して、特別区は低位から高位に転じ、62年度には大都市に比肩するまでに大きく変わった。この特別区の条件が都市総体についての社会関係費の東西格差を縮める大きな条件となったが、大都市、一般都市それぞれの状況を見ると、大都市では47年度で東の78.6、西の118.8の指数は、62年度でやや緩んで80.6と117.8の開きであるが、依然としてその格差は非常に大きい。一般都市については同じく47年度で87.9と118.1の開きであったのが、62年度には90.4と115.6の開きとなり、ここでも格差は幾分緩んでいるが、なお西は東を28%上回る高い支出水準である。

この一般都市を中都市と小都市に分け、さらにそれぞれを人口規模別に分けてとらえたとき、いずれの規模においても東西の格差の大きい状況が持続していることを知る。すなわち、特定の都市の条件によって東西の開きが作

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第69表 1人当り都市社会関係費推移(1)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
全都市		15,067	31,572	46,019	58,226	61,525	68,744	106.2	109.2	111.4	113.1
{	特別区	10,329	26,223	41,205	57,128	64,097	81,945	72.8	97.7	116.0	134.8
	大都市	21,614	43,776	65,803	79,216	86,381	95,330	152.4	156.1	156.4	156.8
{	一般都市	14,183	29,454	42,155	53,345	55,244	60,803	100	100	100	100
	中都市	14,077	29,104	41,669	52,574	54,739	60,880	99.3	98.8	99.1	100.1
{	小都市	14,339	30,013	43,002	54,726	56,199	60,651	101.1	102.0	101.7	99.7
	5~10万	14,203	29,228	41,367	53,115	54,254	57,964	100.1	98.1	98.2	95.3
{	5万以下	14,505	31,165	45,603	57,428	59,731	65,702	102.3	108.2	108.1	108.1
								(東西比較)			
東 日 本	大都市	16,996	33,443	51,039	62,092	70,553	76,859	78.6	77.6	81.7	80.6
	一般都市	12,462	26,041	37,302	47,580	48,981	54,969	87.9	88.5	88.7	90.4
	中都市	12,517	25,866	37,047	46,937	48,130	54,876	88.9	88.9	87.9	90.1
	小都市	12,392	26,301	37,732	48,740	50,629	55,161	86.4	87.7	90.1	91.0
	5~10万	12,138	32,798	36,010	47,033	48,700	52,830	85.5	87.1	89.8	91.1
	5万以下	12,579	35,921	40,706	51,880	54,646	60,332	88.0	89.3	91.5	91.8
西 日 本	大都市	25,675	53,286	79,913	94,193	100,399	112,288	118.8	121.4	116.2	117.8
	一般都市	16,744	34,553	49,510	62,497	65,266	70,307	118.1	117.4	118.1	115.6
	中都市	16,117	33,608	48,457	61,584	65,537	70,929	114.5	100.9	119.7	116.5
	小都市	17,858	36,246	51,451	64,113	64,772	69,136	124.6	119.6	115.3	114.0
	5~10万	18,832	35,921	50,691	63,540	63,917	67,137	132.6	122.5	117.8	115.8
	5万以下	16,968	36,659	52,513	64,946	66,041	72,088	117.0	115.2	110.6	109.7

備考：各年度自治省，地方財政調査研究会編『市町村別財政状況調』『市町村別決算状況調』による。以下各表同じ。

られるのではなく，東西の地域総体の状況であることが裏付けられる。上記の中都市を人口規模別にとらえ，小都市を5万以上と5万以下とに分けてとらえた際の東西の開きが大きかったことで理解を強める。もとよりこの開きに差異がないわけではなく，50万以上都市，40万以上都市での開きは大きく残り，30万以上都市では比較的开きが小さい状況が続けるが，格差という点ではその大きさから考えて，条件持続という点を重視しなければならない。

この社会関係費の東西の開きを地域ごとの性格としてとらえるために地方

第70表 1人当り都市社会関係費推移(2) (中都市)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
一般都市		14,183	29,454	42,155	53,345	55,244	60,803	100	100	100	100
中都市	50万～	16,157	34,576	47,792	58,680	63,819	61,846	113.9	113.4	115.5	101.7
	40～50	15,229	29,308	43,822	54,155	56,093	63,835	107.4	104.0	101.5	105.0
	30～40	12,981	28,157	41,195	53,679	54,543	60,708	91.5	97.7	98.7	99.8
	20～30	14,208	27,817	39,754	48,455	50,390	58,276	100.2	94.3	91.2	95.8
	15～20	13,528	29,853	42,601	54,443	56,535	64,037	95.4	101.1	102.3	105.3
	10～15	13,778	28,249	39,601	50,718	51,985	58,686	97.1	93.9	94.1	96.5
								(東 西 比 較)			
東日本	50万～	13,110	26,512	33,391	44,144	47,581	49,205	81.1	69.9	74.6	79.6
	40～50	11,299	24,287	36,340	46,220	48,379	54,185	74.2	82.9	86.2	84.9
	30～40	12,373	26,553	40,364	50,387	49,589	55,661	95.3	98.0	90.9	91.7
	20～30	13,089	25,060	35,309	44,793	45,681	54,829	92.1	88.8	90.7	94.1
	15～20	12,141	27,311	39,146	50,172	52,240	60,088	89.7	91.9	92.4	93.8
	10～15	12,259	25,668	36,971	46,959	47,135	53,890	89.0	93.4	90.7	91.8
西日本	50万～	17,898	38,392	54,953	67,185	73,086	73,358	110.8	115.0	114.5	118.6
	40～50	16,513	33,988	52,116	66,275	67,588	77,263	108.4	118.9	120.5	121.0
	30～40	14,141	30,334	42,184	57,640	61,291	67,298	108.9	102.4	112.4	110.9
	20～30	15,868	32,652	48,727	57,853	61,138	65,798	111.7	122.6	121.3	112.9
	15～20	17,294	35,791	51,661	66,371	69,111	75,491	127.8	121.3	122.2	117.9
	10～15	15,709	32,798	44,637	58,175	61,873	68,185	114.0	112.7	119.0	116.2

別の状況を見よう。大都市の状況は省略して一般都市でとらえると、東日本の低位は関東と東海の低位の持続を軸としており、東北、北陸も全国平均以下の低位を保持するが、北海道だけは目立った高位を続け、むしろその水準を高めている。北海道の高位にもかかわらず東日本総体としては明確な低位を続けているとすべきであろうか。これに対して西日本についてはいずれの地方も全国平均を上回る高位を保持している。四国、九州は幾分かその高位を低める動きであるが、近畿は逆にその水準を高める動きともとれる推移である。西の地方別状況はなべて支出水準が高いことを裏付けるものであり、前記の人口規模別状況に合わせて把握することで、西高東低の関係を構造的

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第71表 1人当り都市社会関係費推移(3)(地方別,一般都市) (単位:円,%)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)				
								47	53	59	62	
地域												
全	国	14,183	29,454	42,155	53,345	55,244	60,803	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	18,625	37,511	54,896	70,355	74,870	84,767	131.3	130.2	135.5	139.4	
	東北	12,776	27,245	37,991	48,952	51,064	55,959	90.1	90.1	92.4	92.0	
	関東	11,540	23,972	34,123	43,861	45,315	51,146	81.4	80.9	82.0	84.1	
	北陸	12,995	27,640	40,352	50,701	51,819	57,331	91.6	95.7	93.8	94.3	
	東海	11,885	25,211	36,770	46,522	47,000	53,541	83.8	87.2	85.1	88.1	
	計	12,462	26,040	37,302	47,580	48,981	54,969	87.9	88.5	88.7	90.4	
西 日 本	近畿	15,564	32,816	45,337	58,444	63,098	68,800	109.7	107.5	114.2	113.2	
	中国	16,134	33,044	49,008	59,464	59,752	67,270	113.8	116.3	108.2	110.6	
	四国	18,456	37,206	53,036	67,522	68,412	72,379	130.1	125.8	123.8	119.0	
	九州	18,370	37,469	55,258	69,034	70,968	73,898	129.5	131.1	128.5	121.5	
	計	16,744	34,553	49,510	62,497	65,266	70,307	118.1	117.4	118.1	115.6	
(東京圏 大阪圏)	東京圏	11,884	24,523	34,295	44,247	46,019	52,385	83.8	81.4	83.3	86.1	
	大阪圏	16,014	33,503	45,874	59,312	63,476	69,957	112.9	108.8	114.9	115.1	

第72表 1人当り都市社会関係費推移(4)(地方別,中都市) (単位:円,%)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
地域											
全	国	14,077	29,104	41,669	52,574	54,739	60,880	100	100	100	100
東 日 本	北海道	18,410	39,991	51,339	66,662	71,663	83,907	130.8	123.2	130.9	137.8
	東北	12,786	27,392	37,337	48,163	50,220	54,877	90.8	89.6	91.7	90.1
	関東	11,568	23,476	34,467	44,171	45,036	52,033	82.2	82.4	82.3	85.5
	北陸	13,454	27,328	41,674	51,219	52,222	60,578	95.6	100.0	95.4	99.5
	東海	12,130	25,589	36,739	45,239	45,854	52,936	86.2	88.2	83.8	87.0
	計	12,517	25,866	37,047	46,937	48,130	54,876	88.9	88.9	87.9	90.1
西 日 本	近畿	15,550	31,728	45,201	58,984	64,911	71,203	110.5	108.5	118.6	117.0
	中国	21,392	32,272	49,865	59,571	60,515	67,989	152.0	119.7	110.6	111.7
	四国	16,366	43,383	48,832	64,157	63,955	67,881	116.3	117.2	116.8	111.5
	九州	17,184	40,437	53,838	67,781	71,331	74,150	122.1	129.2	130.3	121.8
	計	16,117	33,608	48,457	61,584	65,537	70,929	114.5	116.3	119.7	116.5
(東京圏 大阪圏)	東京圏	11,896	24,254	34,394	44,165	45,636	53,103	84.5	82.5	83.4	87.2
	大阪圏	15,892	32,773	45,728	59,739	64,978	71,934	112.9	109.7	118.7	118.2

第73表 1人当り都市社会関係費推移(5) (地方別, 小都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		14,339	30,013	43,002	54,726	56,199	60,651	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	18,886	39,991	59,981	76,684	80,429	86,266	131.7	139.5	143.1	142.2
	東 北	12,763	27,392	38,919	50,167	52,387	57,702	89.0	90.5	93.2	95.1
	関 東	11,495	23,476	33,426	43,175	45,617	48,655	80.2	77.7	81.2	80.2
	北 陸	12,524	27,328	38,772	50,135	51,327	53,315	87.3	90.2	91.3	87.9
	東 海	11,617	25,589	36,821	48,617	48,837	54,554	81.0	85.6	86.9	89.9
	計	12,392	26,301	37,732	48,740	50,629	55,161	86.4	87.7	90.1	91.0
西 日 本	近 畿	15,594	31,728	45,665	57,096	58,414	62,164	108.8	106.2	103.9	102.5
	中 国	16,225	32,272	46,897	59,258	58,269	65,853	113.2	109.1	103.7	107.4
	四 国	21,381	43,383	59,189	72,556	75,192	79,336	149.1	137.6	133.8	130.8
	九 州	19,687	40,437	56,829	70,404	55,844	73,608	137.3	132.2	99.4	121.4
		計	17,859	36,246	51,451	64,113	64,772	69,136	124.6	119.6	115.3
(東 京 圏		11,861	24,254	34,070	44,456	47,187	50,359	82.7	79.2	84.0	83.0
(大 阪 圏		16,330	32,773	46,279	58,083	58,969	63,526	113.9	107.6	104.9	104.7

なものとして解することが許されよう。その象徴的な条件が東京圏と大阪圏の状況展開に示される。

規模別状況理解の一助として、一般都市を中都市と小都市に分けて地方別状況の推移を表示しておこう(第72表, 第73表)。この区分による地方別状況もそれぞれの地方において、なべて東の各地方で低位で推移し、西の各地方で高位で推移している。それらが近い将来に大きく変る可能性を秘めているようには受取れない。しかし、そのような憶測をするよりも確実な把握をするために、続いて近時の状況理解に移ろう。

58年度から62年度までの毎年度の推移を見る。特別区, 大都市, 一般都市の動向は、特別区の水準上昇が着実なものであり、とくに62年度の上昇が目立つのに対して、大都市は高位であるがそれをさらに高くする性格のものではない。一般都市の伸びは62年度で落ちている。一般都市を中都市と小都市に分け、さらに小都市を5万以上と5万以下とに分けて見ると、小都市に対

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第74表 1人当り都市社会関係費推移(6)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指 数)				
全 都 市		59,735	61,525	64,467	67,350	68,744	110.9	111.4	112.0	112.4	113.1
特 別 区		60,705	64,097	70,467	75,940	81,945	112.7	116.0	122.4	126.7	134.8
	大 都 市	93,869	86,381	90,098	94,256	95,330	155.7	156.4	156.5	157.3	156.8
一 般 都 市		53,587	55,244	57,571	59,934	60,803	100	100	100	100	100
中 都 市		53,389	54,739	57,454	59,952	60,880	99.1	99.1	99.8	100.0	100.1
小 都 市		54,724	56,199	57,795	59,687	60,651	101.6	101.7	100.4	99.6	99.7
5~10万		53,122	54,254	56,022	57,159	57,964	98.6	98.2	97.3	95.4	95.3
5万以下		57,586	59,731	61,110	64,471	65,702	106.9	108.1	106.1	107.6	108.1
							(東 西 比 較)				
東 日 本	大 都 市	67,988	70,553	73,713	75,386	76,859	81.1	81.7	81.8	80.0	80.6
	一 般 都 市	47,937	48,981	51,274	53,564	54,969	89.0	88.7	89.1	89.4	90.4
	中 都 市	47,565	48,130	50,970	53,541	54,876	89.1	87.9	88.7	89.3	90.1
	小 都 市	48,641	50,629	51,864	53,610	55,161	88.9	90.1	89.7	89.8	91.0
	5~10万	46,978	48,700	50,497	51,587	52,830	88.4	89.8	90.1	90.3	91.0
	5万以下	51,985	54,646	54,830	58,138	60,332	90.3	91.5	89.7	90.2	91.8
西 日 本	大 都 市	98,005	100,399	104,743	111,090	112,288	116.9	116.2	116.3	117.9	117.8
	一 般 都 市	63,301	65,266	67,686	70,047	70,307	117.5	118.1	117.6	116.9	115.6
	中 都 市	62,858	65,537	68,029	70,537	70,929	117.7	119.7	118.4	117.7	116.5
	小 都 市	64,097	64,772	67,048	69,134	69,136	117.1	115.3	116.0	115.8	114.0
	5~10万	63,657	63,917	65,849	67,191	67,137	119.8	117.8	117.5	117.6	115.8
	5万以下	64,757	66,041	68,850	72,010	72,088	112.5	110.6	112.7	111.7	109.7

して中都市の水準が上回る方向にあり、5万以上と5万以下の水準の開きが少しずつ大きくなる動きの中で、中都市の東西の開きはわずかに緩み、小都市ではさらに格差が緩み、その小都市では5万以上、5万以下いずれも同じように開き縮めている。そこで中都市について人口規模別に推移を見ると、50万以上で61年度に水準低下、40万以上で同じ61年度に水準上昇という変化があるが、これは特定都市の影響(堺市)を示すもので、いわゆる構造変化とすべきものではない。しかし15万以上で東の水準が上昇傾向を示すのは検討を要する条件であろう。

以上の展開を地方別状況でとらえよう。ここでも大都市の検討を省略して

第75表 1人当り都市社会関係費推移(7) (中都市)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指 数)				
一般都市		53,857	55,244	57,571	59,934	60,803	100	100	100	100	100
中 都 市	50万～	60,233	63,819	64,653	61,806	61,846	111.8	115.5	112.3	103.1	101.7
	40～50	55,271	56,093	58,245	61,427	63,835	102.6	101.5	101.2	102.5	105.0
	30～40	54,501	54,543	57,955	61,125	60,708	101.2	98.7	100.7	102.0	99.8
	20～30	49,025	50,390	52,914	57,597	58,276	91.0	91.2	91.9	96.1	95.8
	15～20	54,903	56,535	60,653	63,528	64,037	101.9	102.3	105.4	106.0	105.3
	10～15	50,713	51,985	54,048	57,064	58,686	94.2	94.1	93.9	95.2	96.5
							(東 西 比 較)				
東 日 本	50万～	44,153	47,581	47,741	47,555	49,205	73.3	74.6	73.8	76.9	79.6
	40～50	48,933	48,379	50,976	51,839	54,185	88.5	86.2	87.5	84.4	84.9
	30～40	50,552	49,589	52,356	56,446	55,661	92.8	90.9	90.3	92.3	91.7
	20～30	45,242	45,681	48,207	53,196	54,829	92.3	90.7	91.1	92.4	94.1
	15～20	49,829	52,240	56,624	58,755	60,088	90.8	92.4	93.4	92.5	93.8
	10～15	47,161	47,135	49,679	52,487	53,890	93.0	90.7	91.9	92.0	91.8
西 日 本	50万～	69,340	73,086	76,669	73,880	73,358	115.1	114.5	118.6	119.5	118.6
	40～50	65,173	67,588	68,878	74,617	77,263	117.9	120.5	118.3	121.5	121.0
	30～40	59,712	61,291	65,414	67,217	67,298	109.6	112.4	112.9	110.0	110.9
	20～30	58,643	61,138	63,550	67,146	65,798	119.6	121.3	120.1	116.6	112.9
	15～20	69,172	69,111	71,908	76,913	75,491	126.0	122.2	118.6	121.1	117.9
	10～15	58,118	61,873	62,719	66,508	68,185	114.6	119.0	116.0	116.5	116.2

一般都市で58年度以降で見ること、東日本ではほとんど各地方の条件が固まったという印象を残す。これに対して西日本では四国、九州の水準低下傾向と中国の上昇傾向とがあって、西は高位平準化への方向が見える。全体としての東西の開きが持続しており、東京圏と大阪圏の格差条件の持続がそれを象徴している。この一般都市の条件理解を補足のために中都市の地方別状況を加えておこう。これで知りうるのは一般都市の状況よりも地方差が大きく、その大きさが持続していることである。西では近畿、中国の水準が高く、西の各地方の水準の開きが小さく平準化している。この状況は小都市において西の水準が相対的に低下して東西の開きが緩んでいることを裏付ける。

都市財政構造分析続論(2)(西村)

第76表 1人当り都市社会関係費推移(8)(地方別, 一般都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全国		53,587	55,244	57,571	59,934	60,803	100	100	100	100	100
東日本	北海道	72,854	74,870	78,262	82,731	84,767	135.3	135.5	135.9	138.0	139.4
	東北	49,496	51,064	53,562	55,194	55,959	92.7	92.4	93.0	92.1	92.0
	関東	44,546	45,315	47,600	50,482	51,146	82.7	82.0	82.7	84.2	84.1
	北陸	49,555	51,819	54,688	55,223	57,331	92.0	93.8	95.0	92.1	94.3
	東海	45,642	47,000	48,824	50,643	53,541	84.7	85.1	84.8	84.5	88.1
	計	47,937	48,981	51,274	53,564	54,969	89.0	88.7	89.1	89.4	90.4
西日本	近畿	60,777	63,098	65,407	67,966	68,800	112.8	114.2	113.6	113.4	113.2
	中国	57,798	59,752	62,823	65,370	67,270	107.3	108.2	109.1	109.1	110.6
	四国	68,603	68,412	69,829	72,659	72,379	127.4	123.8	121.3	121.2	119.0
	九州	68,839	70,968	73,534	75,291	73,898	127.8	128.5	127.7	125.6	121.5
	計	63,301	65,266	67,686	70,047	70,307	117.5	118.1	117.6	116.9	115.6
(東京圏)		45,354	46,019	48,356	51,497	52,385	84.2	83.3	84.0	85.9	86.1
	(大阪圏)	61,743	63,476	66,223	68,746	69,957	114.6	114.9	115.0	114.7	115.1

第77表 1人当り都市社会関係費推移(9)(地方別, 中都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全国		53,389	54,739	57,454	59,952	60,880	100	100	100	100	100
東日本	北海道	69,829	71,663	76,177	82,412	83,907	130.8	130.9	132.6	137.5	137.8
	東北	49,290	50,220	53,329	54,929	54,877	92.3	91.7	92.8	91.6	90.1
	関東	45,123	45,036	47,488	51,407	52,033	84.5	82.3	82.7	85.7	85.5
	北陸	49,659	52,222	54,819	55,200	60,578	93.0	95.4	95.4	92.1	99.5
	東海	44,540	45,854	48,390	49,659	52,936	83.4	83.8	84.2	82.8	87.0
	計	47,565	48,130	50,970	53,541	54,876	89.1	87.9	88.7	89.3	90.1
西日本	近畿	61,858	64,911	67,179	70,177	71,203	115.9	118.6	116.9	117.1	117.0
	中国	58,126	60,515	63,913	66,374	67,989	108.9	110.6	111.2	110.7	111.7
	四国	64,044	63,955	65,683	67,854	67,881	120.0	116.8	114.3	113.2	111.5
	九州	68,184	71,331	73,971	75,571	74,150	127.7	130.3	128.7	126.1	121.8
	計	62,858	65,537	68,029	70,537	70,929	117.7	119.7	118.4	117.7	116.5
(東京圏)		45,677	45,636	45,261	52,176	53,103	85.6	83.4	78.8	87.0	87.2
	(大阪圏)	62,593	64,978	67,582	70,713	73,185	117.2	118.7	117.6	118.0	120.2

(B) 産業関係費の平準化傾向

都市財政において産業関係費の地位は低い。けだし産業関係費が農林水産業費と商工費の合計であり、都市においてはその比重の大きい農林水産業費が小さいからである。既出第29表で示したように、社会関係費は30%に近く大きな比率を示すのに対して、産業関係費は6%程度の比率でしかないからである。しかし、都市の規模に応じた差異、地域別の差異を明らかにすることは重要な課題となる。

全都市の産業関係費の一人当り額は昭和47年度の3,717円から56年度の1万2,197円へ3.28倍した後は伸びが止まり、62年度の1万4,107円へ15.7%増大したにすぎない。この変化状況を特別区、大都市、一般都市の支出水準差としてとらえると、一般都市を基準としたとき特別区は特に低位で、大都市も当初は低かったが、特別区、大都市で急速にその水準を高め、大都市では50年台後半に一般都市を上回る高さとなった。一般都市についても中都市と小都市に分けると、小都市は中都市の2倍ともなる水準という格差がありその開きを持続する。そしてさらに小都市を5万以上と5万以下に分けると、ここでも5万以下の水準が5万以上の2倍ともなる開きがある。小規模都市における農林水産業費の重要度が高くなっている事情を反映する。5万以下都市の相対的地位が低下する過程で、この指数の相対的増大化が現われるという結果となる。

ところでこの産業関係費の支出水準の東西関係はどうであろうか。特別区の低位が全都市での関係では東の水準を下げる要因であるが、大都市の状況は西が東を大きく上回る。一般都市では当初幾分か西高東低の関係であったのが、62年度にはわずかではあるが東が西を上回る条件に転じた。この一般都市の関係を中都市と小都市に分けて見ると、東の上昇は中都市において明らかである。小都市は持続的に西が東を上回る水準を示すが、これを5万以上と5万以下に分けると、一見不可解な状況が展開する。いずれにおいても東西の開きは小都市での開きよりも緩く、62年度ではいずれも東が西を上回って、小都市での関係とは逆となっている。理由はどうか。5万以上と

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第78表 1人当り都市産業関係費推移(1)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
全 都 市		3,717	6,202	9,303	12,197	12,774	14,107	88.7	91.2	95.2	95.0
{ 特別区		610	1,282	1,735	2,403	2,902	4,011	14.5	17.0	21.6	27.0
{ 大都市		3,636	6,790	9,578	13,422	15,115	16,018	86.8	93.8	112.7	107.9
{ 一般都市		4,192	6,732	10,206	13,118	13,414	14,844	100	100	100	100
{ 中都市		3,280	5,518	7,764	9,968	10,386	11,560	78.3	76.1	77.4	77.9
{ 小都市		5,526	8,671	14,470	18,757	19,140	21,346	131.8	141.8	142.7	143.8
{ 5~10万		4,437	6,866	11,071	14,079	14,400	15,810	105.9	108.5	107.4	106.5
{ 5万以下		6,865	11,321	19,877	26,599	27,772	31,752	163.8	194.8	207.0	213.9
								(東 西 比 較)			
東 日 本	{ 大都市	2,497	4,799	6,171	9,901	10,640	13,163	68.7	64.4	70.4	82.2
	{ 一般都市	4,091	6,469	9,876	12,797	13,370	14,937	97.6	96.8	99.7	100.6
	{ 中都市	3,240	5,358	7,715	10,184	10,684	11,948	98.8	99.4	102.9	103.4
	{ 小都市	5,188	8,119	13,522	17,511	18,568	21,039	93.9	93.4	97.0	98.6
	{ 5~10万	4,227	6,634	10,485	13,534	14,402	15,916	95.3	94.7	100.0	100.7
	{ 5万以下	6,585	10,493	18,764	24,828	27,289	32,408	95.9	94.4	98.3	102.1
西 日 本	{ 大都市	4,638	8,622	12,834	16,501	19,079	18,638	127.6	134.0	126.2	116.4
	{ 一般都市	4,342	7,124	10,705	13,626	13,484	14,692	103.6	105.0	100.5	99.0
	{ 中都市	3,334	5,742	7,836	9,623	9,900	10,910	101.6	100.9	95.3	94.4
	{ 小都市	6,136	9,599	15,990	20,710	20,020	21,820	111.1	110.5	104.6	102.2
	{ 5~10万	4,909	7,272	12,091	15,011	14,397	15,622	110.6	109.2	100.0	98.8
	{ 5万以下	7,259	12,538	21,447	29,000	28,372	30,974	105.7	107.9	102.2	97.6

5万以下との支出水準差が極端に大きく、5万以上で東の人口が西の人口より著しく多いという関係が、この不可解な結果をもたらしたのである。次いで中都市の人口規模別状況を見る順序であるが、支出水準も低いのでその説明は省略して地方別状況の検討に移ろう。ここでは中都市と小都市に分けた把握も必要である。

まず一般都市の地方別状況を見よう。小都市で支出水準が高かった性格を反映して、東日本では関東が低位で、順次東海、北陸、東北、北海道と水準を高める。東京圏は関東の水準を下回り、この各地方の開きが年を追って拡

第79表 1人当り都市産業関係費推移(2) (地方別, 一般都市) (単位: 円, %)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)				
								47	53	59	62	
地 域												
全 国		4,192	6,732	10,206	13,118	13,414	14,844	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	5,295	9,195	14,711	18,868	20,169	24,576	126.3	144.1	150.4	164.8	
	東北	4,832	7,795	13,281	16,738	17,139	18,767	115.3	130.1	127.8	126.4	
	関東	2,689	4,166	6,068	7,529	7,947	8,877	64.1	59.5	59.2	59.8	
	北陸	6,128	10,345	16,272	23,074	25,106	29,851	146.2	159.4	187.2	201.1	
	東海	4,855	7,476	11,025	14,830	15,321	16,738	115.8	108.0	114.2	112.8	
	計	4,091	6,469	9,876	12,797	13,370	14,937	97.6	96.8	99.7	100.6	
西 日 本	近畿	2,576	4,107	5,306	6,811	6,626	7,646	61.5	52.0	49.4	51.5	
	中国	6,381	10,774	16,737	22,215	22,767	24,319	152.2	164.0	169.7	163.8	
	四国	5,106	7,841	13,237	18,136	16,318	17,045	121.8	129.7	121.6	114.8	
	九州	5,235	8,788	13,793	17,453	17,620	19,245	124.9	135.2	131.4	129.6	
	計	4,342	7,124	10,705	13,626	13,484	14,692	103.6	105.0	100.5	99.0	
(東京圏)		2,083	3,355	4,593	5,609	5,899	6,375	49.7	45.0	44.0	42.9	
(大阪圏)		2,362	3,711	4,438	5,824	5,788	6,909	56.4	43.5	43.1	46.5	

第80表 1人当り都市産業関係費推移(3) (地方別, 中都市) (単位: 円, %)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
地 域											
全 国		3,280	5,518	7,764	9,968	10,386	11,560	100	100	100	100
東 日 本	北海道	3,742	6,428	10,335	13,715	15,541	17,630	114.1	133.1	149.6	152.5
	東北	3,846	5,838	9,490	12,009	12,969	15,096	117.2	122.2	124.9	130.6
	関東	2,156	3,726	5,026	6,515	6,747	7,609	65.7	64.7	65.0	65.8
	北陸	5,142	9,370	12,937	18,385	21,227	25,689	156.7	166.6	204.4	222.2
	東海	3,980	6,627	9,566	13,043	13,261	14,239	121.3	123.2	127.7	123.2
	計	3,240	5,358	7,715	10,184	10,684	11,948	98.8	99.4	102.9	103.4
西 日 本	近畿	2,012	3,448	3,747	4,846	4,959	6,002	61.3	48.3	47.7	51.9
	中国	5,644	10,154	14,792	18,396	20,140	20,895	172.1	190.5	193.9	180.8
	四国	3,592	4,934	7,885	11,275	10,569	11,446	109.5	101.5	101.8	99.0
	九州	3,582	6,259	9,419	12,010	12,405	13,906	109.2	121.3	119.4	120.3
	計	3,334	5,742	7,836	9,623	9,900	10,910	101.6	100.9	95.3	94.4
(東京圏)		1,683	3,028	3,899	5,010	5,092	5,599	51.3	50.2	49.0	48.4
(大阪圏)		1,948	3,162	3,276	4,263	4,316	5,395	59.4	42.2	41.6	46.7

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第81表 1人当り都市産業関係費推移(4) (地方別, 小都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		5,526	8,671	14,470	18,757	19,140	21,345	100	100	100	100
東 日 本	北海道	7,170	13,079	20,964	27,646	28,240	36,359	129.8	144.9	147.5	170.3
	東北	5,990	10,146	18,654	24,024	23,674	24,685	108.4	128.9	123.7	115.6
	関東	3,530	4,997	8,177	9,771	11,007	12,434	63.9	56.5	57.5	58.2
	北陸	7,139	11,493	20,256	28,786	21,181	34,998	129.2	140.0	110.7	164.0
	東海	5,811	8,536	13,401	17,747	18,621	20,922	105.2	92.6	97.3	98.0
	計	5,188	8,119	13,522	17,511	18,568	21,039	93.9	93.4	97.0	98.6
西 日 本	近畿	3,870	5,605	9,074	11,719	10,932	12,188	70.0	62.7	57.1	57.1
	中国	8,160	12,277	21,528	28,576	27,875	31,074	147.7	148.8	145.6	145.6
	四国	7,225	12,038	21,070	28,397	25,066	25,720	130.8	145.6	131.0	120.5
	九州	7,070	11,594	18,636	23,403	23,575	25,361	127.9	128.8	123.2	118.8
	計	6,136	9,599	15,990	20,710	20,020	21,820	111.1	110.5	104.6	102.2
(東京圏 大阪圏)	東京圏	2,795	4,060	6,169	7,132	8,357	9,027	50.6	42.6	43.7	42.3
	大阪圏	3,439	5,124	7,647	10,317	10,206	11,831	62.2	52.8	53.3	55.4

がり、62年度には北海道は東京圏の4倍ともなる大きな格差を作る。同様に西日本でも近畿は低い、高位への順は四国、九州、中国となつて、ここでは中国の高位が目立つ。東とは異なつて西ではこの地方差は拡がるけれども、東ほど明確なものではなく、それが東西の水準差を縮める条件となり、62年度には東が西を上回ることになった。

そこで中都市と小都市に分けて地方別の状況を見よう。中都市は支出水準が低く地方差も小さい。その条件の下で東の各地方差は増大傾向をたどる。西では地方差が増大するという展開ではない。その結果東西関係の逆転は早く実現した。これに対して小都市では支出水準が中都市よりも著しく高いという基本条件の下で、東の地方差は中都市よりも大きいだけでなく、それがさらに拡大するという動きであったが、西では中国だけが高位となるというような中都市とは異なつて地方間の差が少なく、さらにその差が拡がることなく持続した。

第82表 1人当り都市産業関係費推移(5)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指数)				
全都市		12,285	12,774	12,728	13,211	14,107	94.4	95.2	93.7	94.1	95.0
特別区		2,869	2,902	3,401	3,737	4,011	22.1	21.6	25.0	26.6	27.0
	大都市	14,084	15,115	13,844	14,529	16,018	108.3	112.7	101.9	103.5	107.9
一般都市		13,007	13,414	13,590	14,036	14,844	100	100	100	100	100
中都市		9,986	10,386	10,573	11,152	11,560	76.8	77.4	77.8	79.5	77.9
小都市		18,600	19,140	19,351	19,607	21,346	143.0	142.7	142.4	139.7	143.8
5~10万		13,987	14,400	14,622	14,893	15,810	107.5	107.4	107.6	106.1	106.5
5万以下		26,843	27,772	28,196	28,530	31,752	206.4	207.0	207.5	203.3	213.9
							(東西比較)				
東 日 本	大都市	10,391	10,640	10,823	12,130	13,163	73.8	70.4	78.2	83.5	82.2
	一般都市	12,875	13,370	13,501	14,129	14,937	99.0	99.7	99.3	100.7	100.6
	中都市	10,255	10,684	10,874	11,632	11,948	102.7	102.9	102.8	104.3	103.4
	小都市	17,828	18,568	18,607	19,066	21,039	95.8	97.0	96.2	97.2	98.6
	5~10万	13,781	14,402	14,484	14,810	15,916	98.5	100.0	99.1	99.4	100.7
	5万以下	25,962	27,289	27,545	28,595	32,408	96.7	98.3	97.7	100.2	102.1
西 日 本	大都市	17,371	19,079	16,544	16,664	18,638	123.3	126.2	119.5	114.6	116.4
	一般都市	13,217	13,484	13,732	13,885	14,692	101.6	100.5	101.0	98.9	99.0
	中都市	9,548	9,900	10,083	10,361	10,910	95.6	95.3	95.4	92.9	94.4
	小都市	19,791	20,020	20,512	20,447	21,820	106.4	104.6	106.0	104.3	102.2
	5~10万	14,342	14,397	14,867	15,041	15,622	102.5	100.0	101.7	101.0	98.8
	5万以下	27,970	28,372	28,998	28,452	30,974	104.2	102.2	102.8	99.7	97.6

東西関係の転換を確認するねらいで、58年度以降の毎年度の状況を見よう。特別区、大都市、一般都市の相互の関係では、特別区は持続的に水準を高めているのに対して、大都市ではかなりの変動であるが、一般都市は漸増傾向を示している。一般都市を中都市と小都市に分けると、中都市と小都市の格差緩和の動きと解するのが適切と思われるが、62年度はこの動きに反している。一方、5万以上と5万以下との関係は格差拡大の動きである。

そこで東西関係を見ると、大都市は格差緩和の動きであり、一般都市は東西逆転への流れであり、中都市と小都市で見れば、中都市は東高西低の条件

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第83表 1人当り都市土木費推移(1)

(単位：円，%)

昭和年度 区分	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
							(指 数)				
全 都 市	5,747	23,227	35,049	44,867	49,237	61,260	117.5	116.3	117.2	118.0	
{ 特別区	7,359	11,347	15,685	20,861	26,671	39,430	54.9	52.0	63.5	76.0	
{ 大都市	30,575	46,509	67,615	83,223	90,704	111,014	228.1	224.3	215.8	213.9	
{ 一般都市	13,402	19,414	30,146	38,675	42,029	51,904	100	100	100	100	
{ 中都市	14,221	20,039	29,701	38,549	42,600	53,710	106.1	98.5	101.4	103.5	
{ 小都市	12,203	18,416	30,924	38,901	40,948	48,328	91.1	102.6	97.4	93.1	
{ 5~10万	12,660	18,484	30,433	37,832	40,550	47,800	103.0	100.9	96.5	92.1	
{ 5万以下	11,642	18,316	31,707	40,693	41,669	49,321	86.9	105.2	99.1	95.0	
							(東 西 比 較)				
東 日 本	{ 大都市	24,751	37,006	54,785	71,068	83,041	103,226	81.0	81.0	91.6	93.0
	{ 一般都市	13,037	18,196	29,233	38,347	42,545	53,309	97.3	97.0	101.2	102.7
	{ 中都市	13,692	18,530	28,968	38,601	43,371	55,616	96.3	97.5	101.8	103.5
	{ 小都市	12,192	17,700	29,681	37,889	40,945	48,601	99.9	96.0	100.0	100.6
	{ 5~10万	12,478	17,562	28,900	37,110	40,159	48,335	98.6	95.0	99.0	101.1
	{ 5万以下	11,777	17,921	31,030	39,323	42,583	49,191	101.2	97.9	102.2	99.7
西 日 本	{ 大都市	35,695	55,255	79,877	93,853	97,490	118,164	116.7	118.1	107.5	106.4
	{ 一般都市	13,946	21,235	31,531	39,196	41,202	49,615	104.1	104.6	98.0	95.6
	{ 中都市	14,913	22,137	30,778	38,467	41,340	50,522	104.9	103.6	97.0	94.1
	{ 小都市	12,223	19,617	32,918	40,488	40,951	47,966	100.2	106.4	100.0	99.1
	{ 5~10万	13,067	20,184	33,101	39,070	41,231	46,844	98.6	108.8	101.7	98.0
	{ 5万以下	11,450	18,895	32,661	42,550	40,535	49,475	98.4	103.0	97.3	100.3

が固まる過程で、小都市は西高東低関係が解消に向かう過程とも読める。5万以上と5万以下に分けても東の上昇傾向は明らかで、西高東低から東高西低に転じている。

(C) 土木費の増加停滞と東西関係転換

土木費においても産業関係費と同じく、西高東低の関係から東高西低へと転ずる状況を説明することになる。本稿の基本課題が都市財政の西高東低関係を明らかにするということに対して矛盾する条件を呈示することになる。

第84表 1人当り都市土木費推移(2) (中都市)

(単位：円，%)

昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
区分							(指 数)				
一般都市	13,402	19,414	30,146	38,675	42,029	51,904	100	100	100	100	
中 都 市	50万～	17,268	21,765	30,937	39,567	43,883	60,059	128.8	102.6	104.4	115.7
	40～50	13,448	18,723	31,349	40,725	45,322	59,315	100.3	104.0	107.8	114.3
	30～40	15,123	21,738	28,865	37,504	41,352	65,287	112.8	95.7	98.4	106.5
	20～30	14,343	18,942	30,357	39,683	42,492	50,472	107.0	100.7	101.1	97.2
	15～20	13,946	20,172	27,507	37,629	43,442	53,446	104.1	91.2	103.4	103.0
	10～15	12,203	19,296	28,922	36,498	40,213	47,239	91.1	95.9	95.7	91.0
							(東 西 比 較)				
東 日 本	50万～	16,412	20,585	30,791	43,502	51,231	76,090	95.0	99.5	116.7	126.7
	40～50	15,959	19,464	30,819	39,275	43,365	57,500	118.7	98.3	95.5	96.9
	30～40	13,590	17,606	28,611	38,889	41,556	58,277	89.9	99.1	100.5	105.4
	20～30	13,841	18,541	29,555	39,451	43,051	51,898	96.5	97.4	101.3	102.8
	15～20	13,750	18,994	27,678	38,525	45,244	56,029	98.6	100.6	104.1	104.8
	10～15	11,936	18,083	27,595	35,514	41,222	47,251	97.8	95.4	102.5	100.0
西 日 本	50万～	17,757	22,323	31,010	37,658	39,689	45,460	102.8	100.2	90.4	75.7
	40～50	12,627	18,031	31,937	42,939	48,328	61,841	93.9	101.9	106.6	104.3
	30～40	18,050	27,343	29,167	35,836	41,074	51,381	119.4	101.0	99.3	92.9
	20～30	15,089	19,645	31,975	40,232	41,218	47,360	105.2	105.3	97.0	93.8
	15～20	14,480	22,927	27,057	35,127	38,165	45,623	103.8	98.4	87.9	85.4
	10～15	12,543	21,433	31,465	38,431	38,157	47,213	102.8	108.8	94.9	99.9

それにもかかわらず、土木費の東高西低関係の下でもなお西高東低の構造因が背後にあることを後で説明するための伏線となることを念頭に記述をすすめたい。

全都市の住民一人当り額は昭和47年度の5,747円から56年度の4万4,867円へと7.8倍の高い伸びを示した後で急増のテンポを止めたが、62年度に6万1,260円と突如高水準を示した。この動きを見ても近時の状況については毎年度の変化を見る必要がある。この激しい変化の下で特別区、大都市、一般都市の相互の関係はどうか。特別区の支出水準は低く、大都市の支出水準が著しく高いという関係の下で、特別区の低位が漸次高まるという経過である。

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第85表 1人当り都市土木費推移(3)(地方別,一般都市) (単位:円,%)

昭和年度 地域		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
全 国		13,402	19,414	30,146	38,675	42,029	51,904	100	100	100	100
東 日 本	北海道	15,871	25,503	44,058	60,407	60,902	69,003	118.4	146.2	144.9	132.9
	東北	11,759	17,014	29,571	36,923	38,173	49,829	87.7	98.1	90.8	96.0
	関東	12,676	17,249	25,460	34,848	41,524	52,349	94.6	84.5	98.8	100.9
	北陸	12,886	17,633	30,846	39,143	43,657	49,084	96.1	102.3	103.9	94.6
	東海	13,670	18,773	31,247	39,581	41,930	54,847	102.0	103.6	99.8	105.7
計		13,037	18,196	29,233	38,347	42,545	53,309	97.3	97.0	101.2	102.7
西 日 本	近畿	15,295	23,304	30,186	38,847	41,810	49,128	114.1	100.1	99.5	94.7
	中国	14,627	20,787	32,610	39,026	39,071	48,511	109.1	108.2	93.0	93.5
	四国	13,403	20,718	36,585	45,694	47,845	57,012	100.0	121.4	113.8	109.8
	九州	11,574	18,516	31,014	37,512	39,182	48,443	86.4	102.9	98.2	93.3
	計	13,946	21,235	31,531	39,196	41,202	49,615	104.1	104.6	98.0	95.6
(東京圏)		12,481	17,012	23,947	33,364	40,473	51,275	93.1	79.4	96.3	98.8
(大阪圏)		15,443	23,049	25,581	37,105	41,304	48,429	115.2	94.8	98.3	93.3

第86表 1人当り都市土木費推移(4)(地方別,中都市) (単位:円,%)

昭和年度 地域		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
全 国		14,221	20,039	29,701	38,549	42,600	53,710	100	100	100	100
東 日 本	北海道	15,218	20,939	37,558	58,047	56,993	63,522	107.0	126.5	133.8	118.3
	東北	12,513	17,195	28,871	37,505	39,282	53,602	88.0	97.2	92.2	99.8
	関東	13,327	18,330	25,769	34,864	42,530	53,923	93.7	86.8	99.8	100.4
	北陸	14,502	17,660	31,392	40,153	45,056	52,075	102.0	105.7	105.8	97.0
	東海	14,359	19,348	32,254	41,208	43,128	59,765	101.0	108.6	101.2	111.3
計		13,692	18,530	28,968	38,601	43,371	55,616	96.3	97.5	101.8	103.5
西 日 本	近畿	16,148	24,562	29,508	38,359	41,653	48,979	113.6	99.3	97.8	91.2
	中国	15,560	22,051	33,323	39,222	38,576	49,690	102.4	112.2	90.6	92.5
	四国	12,949	18,508	31,666	43,938	48,595	55,167	91.1	106.6	114.1	102.7
	九州	12,567	18,710	30,512	35,892	39,849	52,674	88.4	102.7	93.5	98.1
	計	14,913	22,137	30,778	38,467	41,340	50,522	104.9	103.6	97.0	94.1
(東京圏)		12,939	17,883	23,804	32,606	41,078	52,444	91.0	80.1	96.4	97.6
(大阪圏)		16,408	24,760	29,019	37,913	41,351	48,163	115.4	97.7	97.1	89.7

第87表 1人当り都市土木費推移(5) (地方別, 小都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		12,203	18,416	30,924	38,901	40,948	48,328	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	16,660	31,912	53,385	64,452	67,675	78,558	136.5	172.5	165.3	162.6
	東 北	10,818	16,796	30,564	36,027	36,435	43,745	88.6	98.8	89.0	90.5
	関 東	11,649	15,207	24,833	34,813	38,501	47,935	95.5	80.3	94.0	99.2
	北 陸	11,230	17,602	30,194	37,966	41,946	45,384	92.0	97.6	102.4	93.9
	東 海	12,917	18,054	29,606	36,923	40,011	46,613	105.9	95.7	97.7	96.5
	計	12,192	17,700	29,681	37,889	40,945	48,601	99.9	96.0	100.0	100.6
西 日 本	近 畿	13,336	20,440	31,805	40,067	42,216	49,538	109.3	102.8	103.1	102.5
	中 国	12,374	17,722	30,852	38,778	40,035	46,185	101.4	99.8	97.8	95.6
	四 国	14,038	23,908	40,785	48,321	46,703	59,870	117.2	141.6	114.1	123.9
	九 州	10,473	18,301	31,570	39,282	38,421	43,597	85.2	102.1	93.8	90.2
	計	12,223	19,617	32,918	40,488	40,951	47,906	100.2	106.4	100.0	99.1
(東 京 圏 大 阪 圏)	東 京 圏	11,666	12,036	24,272	35,294	38,632	47,729	95.6	78.5	94.3	98.8
	大 阪 圏	12,936	18,643	27,371	34,779	41,163	49,296	106.0	88.5	100.5	102.0

一般都市については中都市が小都市より多少高い水準を示すが、この格差は縮まる方向にある。また5万以上と5万以下に分けて比較すると、当初は5万以上が高位にあったのが、逆転して5万以下が高位に転じそれが定着するという展開となる。

ところでこの状況において東西関係はどう展開したであろうか。特別区の変化に応じて東の大都市でも上昇して、大都市の西高東低条件の開きは急速に縮まっている。この東の水準上昇は一般都市についても明らかで、47年度には西高東低の関係であったのが、50年代後半には明確に東が西を上回る条件に転じた。この東高西低への逆転は中都市においてより明確であり、小都市でもほぼ東高への動きの条件にある。また5万以上と5万以下に分けて見ると、いずれでもほぼこの関係にあることを知る。そこで東西関係逆転の中都市を人口規模別に見ると、逆転条件を最もよく示したのが50万以上で、30万以上、15万以上がこれに次ぐが、40万以上は東高西低から西高東低に転ず

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第88表 1人当り都市土木費推移(6)

(単位：円，%)

区分	昭和年度										
	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62	
						(指 数)					
全都市	47,800	49,237	52,190	54,980	61,260	118.0	117.2	115.8	116.8	118.0	
{ 特別区	28,525	26,671	28,433	30,321	39,430	70.4	63.5	63.1	64.4	76.0	
{ 大都市	88,273	90,704	93,676	100,186	111,014	218.0	215.8	207.8	212.8	213.9	
{ 一般都市	40,498	42,029	45,085	47,079	51,904	100	100	100	100	100	
{ 中都市	41,101	42,600	45,860	48,457	53,710	101.5	101.4	101.7	102.9	103.5	
{ 小都市	39,383	40,948	43,605	44,415	48,328	97.2	97.4	96.7	94.3	93.1	
{ 5～10	38,684	40,550	43,237	44,254	47,800	95.5	96.5	95.9	94.0	92.1	
{ 5万以下	40,562	41,669	44,293	44,720	49,321	100.2	99.1	98.2	95.0	95.0	
						(東 西 比 較)					
東 日 本	{ 大都市	79,541	83,041	87,818	96,023	103,226	90.1	91.6	93.7	95.8	93.0
	{ 一般都市	40,793	42,545	45,214	47,475	53,309	100.7	101.2	100.3	100.8	102.7
	{ 中都市	41,409	43,371	46,364	49,316	55,616	100.7	101.8	101.1	101.8	103.5
	{ 小都市	39,629	40,945	42,978	43,834	48,601	100.6	100.0	98.6	98.7	100.6
	{ 5～10万	38,814	40,159	42,345	43,740	48,335	100.3	99.0	97.9	98.8	101.1
	{ 5万以下	41,142	42,583	44,350	44,046	49,191	101.4	102.2	100.1	98.5	99.7
西 日 本	{ 大都市	96,045	97,490	98,912	103,717	118,164	108.8	107.5	105.6	103.5	106.4
	{ 一般都市	40,028	41,202	44,879	46,438	49,615	98.8	98.0	99.5	98.6	95.9
	{ 中都市	40,600	41,340	45,038	47,039	50,522	98.8	97.0	98.2	97.1	94.1
	{ 小都市	39,004	40,951	44,583	45,318	47,906	99.0	100.0	102.2	102.0	99.1
	{ 5～10万	38,460	41,231	44,823	45,179	46,844	99.4	101.7	103.7	102.1	98.0
	{ 5万以下	39,819	40,535	44,222	45,523	49,475	98.2	97.3	99.8	101.8	100.3

るといふ反対の方向を示して多様であるが、その他は程度の差で西高東低から東高西低に転じている。

以上の状況理解をもとに地方別の状況を見よう。一般都市において西高東低から東高西低に転じた主因は関東、東海の水準上昇と近畿、中国の水準低下による。その象徴が東京圏と大阪圏に示され、東京圏は全国水準を上回るまでには上昇していないが、大阪圏の低下が目立っており、62年度には東京圏が大阪圏を上回る高位となった。中都市と小都市に分けて見るとどうか。逆転状況が明確であった中都市では、東日本の各地方でなべて水準上昇があ

第89表 1人当り都市土木費推移(7) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全 国		40,498	42,029	45,085	47,079	51,904	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	59,019	60,902	63,809	64,160	69,003	145.7	144.9	141.5	136.3	132.9
	東北	38,378	38,173	39,701	40,419	49,829	94.8	90.8	88.1	85.9	96.0
	関東	38,660	41,524	44,450	47,385	52,349	95.5	98.8	98.6	100.7	100.9
	北陸	42,158	43,657	45,647	46,175	49,084	104.1	103.9	101.2	98.1	94.6
	東海	40,612	41,930	44,998	48,085	54,847	100.3	99.8	99.8	102.1	105.7
	計	40,793	42,545	45,214	47,475	53,309	100.7	101.2	100.3	100.8	102.7
西 日 本	近畿	40,096	41,810	45,768	47,564	49,128	99.0	99.5	101.5	101.0	94.7
	中国	38,972	39,071	41,881	43,348	48,511	96.2	93.0	92.9	92.1	93.5
	四国	47,662	47,845	50,771	53,814	57,012	117.7	113.8	112.6	114.3	109.8
	九州	37,845	39,182	43,212	43,917	48,443	93.4	93.2	95.8	93.3	93.3
	計	40,028	41,202	44,879	46,438	49,615	98.8	98.0	99.5	98.6	95.6
(東京圏 大阪圏)	東京圏	37,144	40,473	43,631	46,642	51,275	91.7	96.3	95.8	99.1	98.8
	大阪圏	39,513	41,304	45,317	46,932	48,429	97.6	98.3	100.5	99.7	93.3

って東高を導き、62年度に北海道、北陸が低下したものの東高を抑える条件にはなっていない。西の低落は近畿と中国の低落によっており近畿の低落が目立つ。したがって東京圏と大阪圏を対比すると、一般都市の際の条件を上回る逆転の関係が呈示される。続いて小都市を見ると、東西にとくに大きな開きのないままに持続したのは、各地方の状況に大きな変化がなかったというとらえ方もできるが、水準上昇の地方と下降の地方とがあって、その組み合わせの結果の東西関係と見る方が適切であろう。その上昇下降もそれぞれの地方で方向として示されているとは言えない多様性がある。

この土木費の展開をより確実に知るために、58年度以降の毎年度の状況を見よう。既述の59年度比62年度の急上昇は、61年度までの漸増の後で62年度に急増したことを知る。この急増に際しても目立ったのが特別区である。一般都市の伸びを中都市と小都市とで見ると、伸びは中都市で大きく傾向的状況を示す。そこでこの状況を東西の関係でとらえると、西高東低から東高西

低への逆転傾向は人口規模の大きい都市で目立つ。大都市は依然として西高東低の関係で残るものの、極端な西高東低の条件はなくなろうとしている。一般都市は62年度で一気に東高が実現し、それを推進したのが中都市であり、小都市においても5万以上で具体化している。

続いて地方別状況を見よう。一般都市では東高の条件を作り出した主因は関東、東海の着実な上昇によっている。西の低落は中国、四国の漸落の後で62年度に近畿が急落したことによっている。62年度に大阪圏が東京圏を下回る低位になった。

(D) 教育費の東高西低関係の持続

教育費は他の諸経費が西高東低の関係を示す中でも、早い時期から東高西低を示す例外的な状況を示していた。その状況が近時においても持続していることを明らかにすることがここでの課題となろう。住民一人当りの全都市の教育費は昭和47年度の1万1,640円から56年度の3万8,366円へと3.3倍増した後、62年度の3万8,236円へと横這いを続ける屈折的な経過を示した。この56年度以降で一般都市は支出水準を下げたが、大都市は増大を続け特別区はさらにそれを上回って増大した。一般都市での伸び止まりは、当然中都市、小都市でも同じで、5万以上、5万以下に分けて見ても同じである。

そこでこれらを東と西の関係でとらえると、一般都市では早い時期に西高東低から東高西低に転じているが、大都市については引続いて西が東を上回る高位を保っている。一般都市を中都市と小都市に分けて見ると、東高西低はより強く中都市に示されるが、小都市といえども東高西低の関係を保持している。小都市を5万以上と5万以下に分けたとき、この小都市の状況がどう反映するかを見ると、5万以上では東西の開きは小さくほぼ拮抗しているが、5万以下では明確に東の高位が持続している。大都市を外せば人口規模の大きい都市での東の高位がはっきりとしている。そこで中都市について人口規模別の状況をとらえると、支出水準についての傾向性を見ることはできないが、東西の関係では50万以上と10万以上の両極で東の高位が示され、そ

第90表 1人当り都市教育費推移(1)

(単位：円, %))

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
									(指 数)		
全都市		11,640	21,664	31,027	38,366	38,143	38,236	102.6	101.2	105.4	109.2
{	特別区	13,598	24,266	30,738	40,386	44,918	49,126	119.9	100.3	124.2	140.2
	大都市	11,682	24,250	32,824	41,185	42,906	46,227	103.0	107.1	118.6	132.0
{	一般都市	11,343	20,709	30,657	37,442	36,174	35,030	100	100	100	100
{	中都市	11,417	20,878	30,256	36,673	36,018	34,908	100.7	98.7	99.6	99.7
{	小都市	11,235	20,440	31,359	38,819	36,470	35,271	99.0	102.3	100.8	100.7
{	5~10万	11,684	20,878	32,178	39,572	36,470	34,498	103.0	105.0	100.8	98.5
{	5万以下	10,681	19,796	30,056	37,558	36,469	36,725	94.2	98.0	100.8	104.8
								(東 西 比 較)			
東 日 本	大都市	10,906	20,644	30,419	39,768	42,420	43,661	93.4	92.7	98.9	94.4
	一般都市	11,270	20,886	31,377	39,145	37,433	35,775	99.4	102.4	103.5	102.1
	中都市	11,302	21,009	30,669	38,372	37,444	35,813	99.0	101.4	104.0	102.6
	小都市	11,229	20,704	32,570	40,540	37,412	35,699	100.0	103.9	102.6	101.2
	5~10万	11,454	20,911	32,863	40,278	36,364	34,755	98.0	102.1	99.7	100.7
	5万以下	10,903	20,374	32,065	41,023	39,595	37,793	102.1	106.7	108.6	102.9
西 日 本	大都市	12,366	27,569	35,123	42,425	43,336	48,582	105.8	107.0	101.0	105.1
	一般都市	11,451	20,445	29,566	34,739	34,161	33,816	101.0	96.4	94.4	96.5
	中都市	11,568	20,695	29,648	33,958	33,689	33,395	101.3	98.0	93.5	95.7
	小都市	11,244	19,995	29,415	36,121	35,021	34,611	100.1	93.8	96.0	98.1
	5~10万	11,453	20,818	30,983	38,361	36,657	34,040	104.4	96.3	100.5	98.7
	5万以下	10,369	18,947	27,220	32,862	32,591	35,455	97.1	90.6	89.4	96.5

の間の各ランクでは東西のいずれが高位となるかを持続的条件で指摘することができないような無性格の状況である。

続いてこの東西関係を地方別状況で見よう。一般都市の東西関係は持続的に東が高位であるが、それは東の各地方が持続的に高位を示しているのではなく、関東は高位からの低下過程を示し、他の地方が低位からの上昇であったのとの総合が東の高位となっている。西についても近畿の高位からの低下、他の地方の低位からの上昇への動きとなっており、その要約が西の低位となっている。関東の低下の程度よりも近畿の低下の程度が大きく、それが西の

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第91表 1人当り都市教育費推移(2)(中都市)

(単位:円,%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指数)			
一般都市		11,343	20,709	30,657	37,442	36,174	35,030	100	100	100	100
中都市	50万～	11,173	21,256	31,384	34,326	36,389	35,247	98.5	102.4	100.6	100.6
	40～50	9,109	16,748	29,830	34,918	35,613	34,282	80.3	97.3	98.4	97.9
	30～40	12,020	22,324	30,896	37,900	36,800	37,824	106.0	100.8	101.7	108.0
	20～30	11,164	18,941	30,193	37,977	35,554	33,103	98.4	98.5	98.3	94.5
	15～20	11,442	22,005	26,941	35,280	35,713	36,048	100.9	87.9	98.7	102.9
	10～15	12,737	23,610	31,264	37,401	36,188	34,394	112.3	102.0	100.0	98.2
								(東西比較)			
東日本	50万～	11,339	22,093	29,714	33,826	37,951	38,419	101.5	94.7	104.3	109.0
	40～50	9,009	17,364	32,115	37,625	38,056	33,050	98.9	107.7	106.9	96.4
	30～40	11,989	21,902	30,859	39,055	35,567	38,145	99.7	99.9	96.6	100.8
	20～30	10,120	18,803	30,741	39,040	36,422	33,708	90.7	101.8	102.4	101.8
	15～20	10,721	20,989	25,534	36,399	37,281	37,270	93.7	94.8	104.4	103.4
	10～15	13,981	24,780	32,906	40,079	39,401	36,513	109.8	105.3	108.9	106.2
西日本	50万～	11,078	20,860	32,214	34,569	35,498	32,360	99.2	102.6	97.6	91.8
	40～50	9,142	16,172	27,298	30,784	31,972	35,997	100.4	91.5	89.8	96.4
	30～40	12,079	22,895	30,940	36,509	38,480	37,765	100.5	100.1	104.6	97.2
	20～30	12,712	19,183	29,086	35,468	33,573	31,783	113.9	96.3	94.4	96.0
	15～20	13,400	24,377	30,632	32,154	31,123	32,347	117.1	113.7	87.1	89.7
	10～15	11,156	21,547	28,120	32,089	29,631	30,196	87.6	89.9	81.9	87.8

低位持続の基因となっているように思われる。これらの結果、47年度では地方ごとの格差はかなり大きかったが、それが急速に緩和の方向をとり、62年には地方間の平準化が大きく実現したといえることができる。

既述のように中都市と小都市の東西関係に差異があった。この点を配慮してここでも地方別状況を中都市と小都市に分けて見ることにしたい。中都市の各地方別状況はとくに一般都市の状況と大きく変わっていない。しかし各地方の比重に差があり、関東の指数低下よりも近畿の指数低下が大きかったことが、中都市での東の上位をもたらしたものとすべきであろう。同様の理由で小都市においては中都市とは逆の条件を反映して、関東の水準低下にも

第92表 1人当り都市教育費推移(3) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度						(指数)				
	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
全 国	11,343	20,709	30,657	37,442	36,174	35,030	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	10,188	20,327	31,348	38,555	37,900	40,474	89.8	102.3	104.8	115.5
	東北	9,579	17,307	28,192	36,359	34,903	35,995	84.4	92.0	96.5	102.8
	関東	13,147	24,522	33,894	41,406	38,747	35,780	115.9	110.6	107.1	102.1
	北陸	9,204	16,673	28,322	39,960	38,208	36,102	81.1	92.4	105.6	103.1
	東海	10,267	18,454	29,890	36,467	36,052	34,372	90.5	97.5	99.7	98.1
計	11,270	20,886	31,377	39,145	37,433	35,775	99.4	102.4	103.5	102.1	
西 日 本	近畿	14,413	25,894	32,900	37,919	37,427	33,857	127.1	107.3	103.5	96.7
	中国	10,245	18,181	28,780	33,346	33,487	38,114	90.3	93.9	92.6	108.8
	四国	8,968	15,207	26,402	30,619	29,792	34,330	79.1	86.1	82.4	98.0
	九州	8,740	15,553	26,008	32,045	30,963	32,300	77.1	84.8	85.6	92.2
計	11,451	20,445	29,567	34,739	34,161	33,816	101.0	96.4	94.4	96.5	
(東京圏)	13,946	25,882	34,685	42,240	39,527	35,519	122.9	113.1	109.3	101.4	
(大阪圏)	15,189	26,794	33,229	38,121	37,627	34,099	133.9	108.4	104.0	97.3	

かかわらず東の高位が残り、西の各地方では水準の上昇によっても全国平均に及ばなかったという条件がある。中都市ではなお地方別の格差が示されるが、小都市では北海道を例外として地方間の開きは非常に小さくなっている。

以上、目的別分類に即した費目についての状況を見た。主題の西高東低関係という条件からすると、この条件を示すのは社会関係費だけで、他の諸経費については東高西低に転じたか、西高の条件を特記すべきものではないことが呈示された。それにもかかわらず、あえて西高東低を問題とするには、何かの補足が必要であろう。検討の対象としなかった総務費、公債費等にそれが求められるべきかもしれないが、それは別の機会に譲って、この目的分類による諸経費を別の観点から明らかにする意味で、続いて性質別分類による経費の状況を見ることにしたい。

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第93表 1人当り都市教育費推移(4)(地方別, 中都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		11,417	20,878	30,256	36,673	36,018	34,908	100	100	100	100
東 日 本	北海道	9,054	18,258	28,027	35,047	35,452	36,655	79.3	92.6	98.4	105.0
	東北	9,156	17,387	27,669	35,821	36,194	36,898	80.2	91.5	100.5	105.7
	関東	13,311	24,883	33,399	41,143	39,031	36,463	116.6	110.4	108.4	104.5
	北陸	8,958	16,495	26,789	40,028	37,894	35,693	78.5	88.5	105.2	102.2
	東海	10,257	17,665	28,997	34,509	34,750	33,544	89.8	95.8	96.5	96.1
	計	11,302	21,009	30,669	38,372	37,444	35,813	99.0	101.4	104.0	102.6
西 日 本	近畿	14,568	26,628	33,041	37,105	36,750	33,127	127.6	109.2	102.0	94.9
	中国	10,660	18,566	29,477	33,242	33,215	39,599	93.4	97.4	92.2	113.4
	四国	7,643	13,110	24,875	30,019	28,300	33,568	66.9	82.2	78.6	96.2
	九州	8,011	13,749	24,544	29,317	29,673	30,470	70.2	81.1	82.4	87.3
	計	11,568	20,695	29,648	33,958	33,689	33,395	101.3	98.0	93.5	95.7
(東京圏 大阪圏)	東京圏	13,986	25,973	34,170	41,907	39,979	36,251	122.5	112.9	111.0	103.8
	大阪圏	15,136	27,339	33,471	37,350	37,077	33,746	132.6	110.6	102.9	96.7

第94表 1人当り都市教育費推移(5)(地方別, 小都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		11,235	20,440	31,359	38,819	36,470	35,271	100	100	100	100
東 日 本	北海道	11,569	23,234	36,094	44,565	42,140	47,132	103.0	115.1	115.5	133.6
	東北	10,076	17,260	28,934	37,187	32,879	34,539	89.7	92.3	90.2	97.9
	関東	12,886	23,841	34,897	41,989	37,640	33,864	114.7	111.3	103.2	96.0
	北陸	9,456	16,883	30,153	39,925	38,591	36,607	84.2	96.2	105.8	103.8
	東海	10,278	19,439	31,346	39,664	38,139	35,759	91.5	100.0	104.6	101.4
	計	11,229	20,704	32,571	40,540	37,412	35,699	100.0	103.9	102.6	101.2
西 日 本	近畿	14,056	24,248	32,560	39,952	39,175	34,274	125.1	103.8	107.4	97.2
	中国	9,243	17,245	27,063	33,544	34,014	35,186	82.3	86.3	93.3	99.8
	四国	10,823	18,232	28,726	31,517	32,062	35,511	96.3	91.6	87.9	100.7
	九州	9,550	17,556	27,629	35,028	32,437	34,396	85.0	88.1	88.9	97.5
	計	11,244	19,995	29,415	36,121	35,021	34,611	100.1	93.8	96.0	98.1
(東京圏 大阪圏)	東京圏	13,874	25,683	35,857	43,084	38,151	33,322	123.5	114.3	104.6	94.5
	大阪圏	15,325	25,388	32,560	40,340	39,279	34,594	136.4	103.8	107.7	98.1

(2) 性質別歳出の推移概観

性質別歳出については人件費、扶助費、補助費等、普通建設事業費をとりあげ、普通建設事業費については補助事業費を加える。人件費は本来中立的性格のものであり、人口規模や地域によって格差のあろうはずのないものとの期待で検討することになり、扶助費は社会関係費の状況のひとつの側面を示すものとの期待があり、補助費等は諸政策の遂行に当って地方政府の直接の施策に代る方策の状況把握であり、普通建設事業費は単に土木費の状況理解の方便ではなく、産業関係費、教育費、そして社会関係費にも及ぶ広い領域での施策の方法を把握する手段である。殊にこの普通建設事業が国庫の補助を支えに実施されるものがある点を知るために、補助事業費の状況を補足説明することを考えた。

(A) 人件費の増大と東西格差の保持

人件費の状況を住民一人当たり額で把握することが妥当であるかには疑問があろう。地方公務員数の適正配置を問題とする観点に対しては何らかの説明ともなるが、地方公務員の給与水準等の適否を検討するのを課題とするには適さない。それを承知の上で、後者の説明は別の機会に譲って、ここではこれまでの方法を踏襲して、住民一人当たり額による検討をする。

全都市の住民一人当たり額は昭和47年度の1万4,521円から56年度の4万6,465円へ3.2倍と大きく伸びた後で、62年度の5万5,986円へ1.2倍と伸びを止めている。それでも諸経費の圧縮が強行された過程での伸率として見ると、この62年度への伸びは注目すべきであろう。そこでこの状況を特別区、大都市、一般都市に分けて見ると、一般都市に較べれば特別区の伸びが大きく、これに反して大都市の伸びが鈍いが、特別区では人件費の項目の扱いの差による点があり、大都市については給与の条件の調整過程と見ることができよう。一般都市を中都市と小都市に分けた把握では、小都市の水準が伸びた結果となって示されるのも、小都市より中都市の構成比率が増大したことの反映であり、とくに小都市の給与水準が高まったことを示すものではない。

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第95表 1人当り都市人件費推移(1)

(単位：円, %)

昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
区分							(指 数)				
全都市	14,521	29,260	37,642	46,465	51,437	55,986	104.7	106.3	106.8	106.5	
{ 特別区	13,354	29,092	39,493	50,670	58,002	62,710	96.3	111.5	120.4	119.3	
{ 大都市	17,956	34,934	46,402	56,799	61,738	66,906	129.5	131.0	128.2	127.3	
{ 一般都市	13,863	27,961	35,424	43,474	48,164	52,570	100	100	100	100	
{ 中都市	13,728	27,525	34,504	42,325	47,124	51,226	99.0	97.4	97.8	97.4	
{ 小都市	14,057	28,657	37,031	45,533	50,131	55,230	101.4	104.5	104.1	105.1	
{ 5~10万	13,731	27,603	35,288	43,344	47,362	51,907	98.5	99.6	98.3	98.7	
{ 5万以下	14,549	30,204	39,803	49,202	55,159	61,477	104.9	112.4	114.5	116.9	
							(東 西 比 較)				
東	大都市	15,741	30,125	39,858	49,610	54,674	59,055	87.7	85.9	88.6	88.3
{ 一般都市	13,093	26,405	33,960	41,641	46,063	50,587	94.4	95.9	95.6	96.2	
{ 中都市	12,999	26,045	33,055	40,458	44,887	49,176	94.7	95.8	95.3	96.0	
{ 小都市	13,214	26,938	35,486	43,775	48,340	53,467	94.0	95.8	96.4	96.8	
{ 5~10万	12,805	26,023	33,858	41,767	45,626	50,311	93.8	95.9	96.3	96.9	
{ 5万以下	13,807	28,403	38,296	47,469	53,992	60,486	94.9	96.2	97.9	98.4	
西	大都市	19,904	39,359	52,657	63,085	67,995	74,114	110.8	113.5	110.1	110.8
{ 一般都市	15,010	30,285	37,644	46,385	51,526	55,820	108.3	106.3	107.0	106.2	
{ 中都市	14,699	29,584	36,632	45,309	50,780	54,656	107.0	106.2	107.8	106.7	
{ 小都市	15,582	31,542	39,841	48,290	52,887	57,955	110.8	107.6	105.5	104.9	
{ 5~10万	15,569	30,516	37,779	46,048	50,382	54,761	114.0	107.1	106.4	105.5	
{ 5万以下	15,594	32,850	41,929	51,551	56,607	62,164	107.2	105.3	102.6	101.1	

ところでこの人件費の状況を東西関係でとらえるとどうなるであろうか。格差があるべきではないことを念頭に格差の状況に注目しなければならない。大都市の東西の開きは47年度以降一貫して大きなもので、非常に大きいと表現してよい。それは恐らく常識的理解をはるかに超える大きさとすべきであろうし、その開きが少しも縮まっていけないことにも注目すべきであろう。一般都市については、大都市ほどではないにしても、東西の開きはかなり大きい西高東低の関係であり、その格差条件が持続して、その格差の緩和はとりあげるほどのものではない。西日本では公務員数が相対的に多いという点が

第96表 1人当り都市人件費推移(2) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %))

地 域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
全 国		13,863	27,961	35,424	43,474	48,164	52,570	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	16,735	34,040	43,506	53,997	59,932	66,241	120.7	122.8	124.4	126.0
	東 北	12,953	25,922	33,142	40,172	44,213	49,678	93.4	93.6	91.8	93.7
	関 東	12,513	25,491	32,688	40,275	44,831	48,817	90.3	92.3	93.1	92.9
	北 陸	13,724	26,841	34,958	42,616	46,722	52,769	99.0	98.7	97.0	100.4
	東 海	12,881	26,047	33,806	41,433	45,677	49,914	92.3	95.4	94.8	94.9
	計	13,093	26,405	33,960	41,641	46,063	50,587	94.4	95.9	95.6	96.2
西 日 本	近 畿	14,786	30,046	37,713	47,040	52,346	57,363	106.7	106.5	109.1	109.1
	中 国	15,935	31,158	38,508	47,160	53,138	56,700	114.9	108.7	110.3	107.9
	四 国	14,084	28,381	35,733	43,773	49,027	52,700	101.6	100.9	101.8	100.2
	九 州	15,005	30,693	37,576	45,803	49,948	53,846	108.2	106.1	103.7	102.4
	計	15,010	30,285	37,644	46,385	51,526	55,820	108.3	106.3	107.0	106.2
(東 京 圏 大 阪 圏)	東 京 圏	12,593	25,661	32,852	40,575	45,355	48,840	90.8	92.7	94.2	92.9
	大 阪 圏	14,860	30,195	37,836	47,311	52,893	57,636	107.2	106.8	109.8	109.6

あるとしても、それが大きな東西格差をもたらすものとは言えない。この一般都市に示される格差状況が特定の都市の状況によるものかという点では、これを中都市と小都市に分け、さらに小都市を5万以上と5万以下に分けて見たとき、依然として東西の開きがほぼ同じ程度で示されるという結果を知ると、特定の都市によるものではないことが解るとともに、人件費について東と西それぞれに共通した差異のある対応があるのではないかの期待を残す。この課題は後で扱うことにしたい。ここでは中都市の人口規模別状況理解は省略して、続いて地方別の状況を見よう。

東西格差の大きい大都市について都市別の検討を加える余地は残されているが一般都市から始めよう。一般都市の西高東低関係は東の低位の条件が関東の低位を軸として、これに東北、東海が続くことで形成され、北海道の高位を相殺していることを知る。これに対して西では関東に対比すべき近畿が特別に高位で他の地方を上回っており、それが西を高位に導いている。関東

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第97表 1人当り都市人件費推移(3)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指数)				
全都市		49,252	51,437	53,148	54,773	55,986	107.0	106.8	107.0	106.6	106.5
{ 特別区		55,234	58,002	59,386	61,339	62,710	120.1	120.4	119.6	119.4	119.3
{ 大都市		59,786	61,738	64,524	65,712	66,906	129.9	128.2	129.9	127.9	127.3
{ 一般都市		46,008	48,164	49,653	51,367	52,570	100	100	100	100	100
{ 中都市		44,903	47,124	48,530	50,143	51,226	97.6	97.8	97.7	97.6	97.4
{ 小都市		48,053	50,131	51,798	53,732	55,230	104.4	104.1	104.3	104.6	105.1
{ 5~10万		45,431	47,362	48,870	50,587	51,907	98.7	98.3	98.4	98.5	98.7
{ 5万以下		52,677	55,159	57,275	59,684	61,477	114.5	114.5	115.3	116.2	116.9
							(東西比較)				
東 日 本	{ 大都市	52,739	54,674	56,382	58,144	59,055	88.2	88.6	87.4	88.5	88.3
	{ 一般都市	44,151	46,063	47,745	49,603	50,587	96.0	95.6	96.2	96.6	96.2
	{ 中都市	43,008	44,887	46,422	48,224	49,176	95.8	95.3	95.7	96.2	96.0
	{ 小都市	46,311	48,340	50,315	52,330	53,467	96.4	96.4	97.1	97.4	96.8
	{ 5~10万	43,935	45,626	47,691	49,393	50,311	96.7	96.3	97.6	97.6	96.9
	{ 5万以下	51,087	53,992	56,006	58,906	60,486	97.0	97.9	97.8	98.7	98.4
西 日 本	{ 大都市	66,058	67,995	71,802	72,399	74,114	110.5	110.1	111.3	110.2	110.8
	{ 一般都市	48,971	51,526	52,718	54,219	55,820	106.4	107.0	106.2	105.6	106.2
	{ 中都市	47,985	50,780	51,968	53,311	54,656	106.9	107.8	107.1	106.3	106.7
	{ 小都市	50,737	52,887	54,113	55,911	57,955	105.6	105.5	104.5	104.1	104.9
	{ 5~10万	47,998	50,382	50,968	52,736	54,761	105.6	106.4	104.3	104.2	105.5
	{ 5万以下	54,713	56,607	58,840	60,611	62,164	103.9	102.6	102.7	101.6	101.1

と近畿の基礎となる東京圏と大阪圏とを対比すると、どうにも説明がつけ難いほどに大きな開きとなっている。

近時の状況理解のために58年度以降の毎年度の推移を表示しよう。住民一人当りの人件費は着実に増大して、他の経費に示されるような変動の波はない。この点に集約されるように特別区、大都市、一般都市に分けて見ても、中都市と小都市に分けても、さらに5万以上と5万以下とに分けても、それぞれの支出の伸びは着実である。その結果東西の開きもほぼ従来の関係を残す推移となっている。そこでこれらの状況を一般都市で代表させることにし

第98表 1人当り都市人件費推移(4) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全 国		46,008	48,164	49,653	51,367	52,570	100	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	58,507	59,932	61,344	63,965	66,241	127.2	124.4	123.5	124.5	126.0
	東 北	42,509	44,213	45,866	48,285	49,678	92.4	91.8	92.4	94.0	93.7
	関 東	42,836	44,831	46,454	48,077	48,817	93.1	93.1	93.6	93.6	92.9
	北 陸	43,737	46,722	49,233	51,424	52,769	95.1	97.0	99.2	100.1	100.4
	東 海	43,623	45,677	47,308	49,050	49,914	94.8	94.8	95.3	95.5	94.9
	計	44,151	46,063	47,745	49,603	50,587	96.0	95.6	96.2	96.6	96.2
西 日 本	近 畿	49,476	52,546	53,956	55,960	57,363	107.5	109.1	108.7	108.9	109.1
	中 国	50,560	53,138	53,634	55,046	56,700	109.9	110.3	108.0	107.3	107.9
	四 国	45,995	49,027	50,040	50,686	52,700	100.0	101.8	100.8	98.7	100.2
	九 州	48,236	49,948	51,147	52,175	53,846	104.8	103.7	103.0	101.6	102.4
	計	48,971	51,526	52,718	54,219	55,820	106.4	107.0	106.2	105.6	106.2
(東 京 圏 大 阪 圏)	東 京 圏	43,241	45,355	46,759	48,357	48,840	94.0	94.2	94.2	94.1	92.9
	大 阪 圏	49,779	52,893	54,188	56,217	57,636	108.2	109.8	109.1	109.4	109.6

て、一般都市を地方別にとらえると、各地方の指数はほぼ同一の水準で推移したという印象を受ける。例外を求めるならば、北陸が指数を高めたということであろう。

(B) 扶助費の増加停滞と東西格差の増大

西高東低の条件を端的に表現した社会関係費を反映する扶助費を見よう。全都市の住民一人当り額は昭和47年度の5,853円から56年度の2万6,666円へと4.56倍の急増大をした後で62年度の2万7,900円へとわずか4.6%増に止るという急変であり、この間59年度の額は56年度より低額となった。減額は老人医療費の不計上ということによるものではあるが、伸びが著しく小さいという条件を変えるものではない。この推移でまず注目すべきは特別区、大都市、一般都市の関係で、一般都市の伸びを大都市が上回り、特別区はさらにこの大都市をも上回る伸びを示した。特別区は62年度に一般都市を5割近く

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第99表 1人当り都市扶助費推移(1)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
全 都 市		5,853	13,128	20,798	26,666	26,371	27,900	109.9	112.6	116.7	118.6
特 別 区		5,227	13,270	22,039	29,091	30,467	34,189	98.1	119.3	134.9	145.3
	大 都 市	8,417	18,026	30,357	38,760	40,038	42,999	158.0	164.3	177.2	182.7
一 般 都 市		5,327	11,968	18,476	23,475	22,591	23,533	100	100	100	100
中 都 市		5,179	11,615	18,201	23,252	22,771	23,849	97.2	98.5	100.8	101.3
小 都 市		5,543	12,533	18,957	23,875	22,250	22,908	104.1	102.6	98.5	97.3
5~10万		4,978	11,345	17,283	22,049	20,540	21,140	93.4	93.5	90.9	89.8
5万以下		6,238	14,379	21,620	26,935	25,355	26,230	117.1	117.0	112.2	111.5
								(東 西 比 較)			
東 日 本	大 都 市	5,565	11,783	19,881	25,312	26,485	29,126	66.1	65.5	66.1	67.7
	一 般 都 市	4,384	9,989	15,223	19,208	18,069	18,889	82.3	82.4	80.0	80.3
	中 都 市	4,361	9,782	14,970	18,958	18,125	19,100	84.2	82.2	79.6	80.1
	小 都 市	4,413	10,295	15,650	19,660	17,961	18,457	79.6	82.6	80.7	80.6
	5~10万	3,933	9,440	14,420	18,247	16,672	17,063	79.0	83.4	81.2	80.7
	5万以下	5,112	11,663	17,775	22,259	20,646	21,557	82.0	82.2	81.4	82.2
西 日 本	大 都 市	10,925	23,773	40,370	50,521	52,042	55,734	129.8	133.0	130.0	129.6
	一 般 都 市	6,729	14,925	23,409	30,248	29,287	31,111	126.3	126.7	132.0	132.2
	中 都 市	6,249	14,163	22,947	30,115	30,361	31,797	120.7	126.1	133.3	133.3
	小 都 市	7,584	16,290	24,258	30,484	28,852	29,785	136.8	128.0	129.7	130.0
	5~10万	7,320	14,859	22,268	28,568	27,272	28,426	147.1	128.8	132.8	134.5
	5万以下	7,826	18,113	27,044	33,271	31,198	31,535	125.5	125.1	123.0	120.2

上回るが、47年度では一般都市を下回る低位であった。続いて一般都市を見よう。中都市と小都市に分け、小都市を5万以上と5万以下に分けると、中都市は小都市より伸びが大きく、5万以下が5万以上より伸びが大きい。

さて東西の関係はどうか。大都市の格差は極端に大きく、それが持続している。59年度の東の2万6,485円に対する西の5万2,042円はまさに2倍である。一般都市についても東西の格差は持続しており、それは増大方向にある。62年度の80.3対132.2の開きは、これが東と西の総体の水準を比較する数値かと思わせるほどの大きさである。中都市と小都市に分けて見ると、50年台

第100表 1人当り都市扶助費推移(2) (中都市)

(単位：円，%)

昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
区分							(指 数)				
一般都市	5,327	11,968	18,476	23,475	22,591	23,533	100	100	100	100	
中 都 市	50万～	5,012	12,983	22,267	29,739	29,723	26,830	94.1	120.5	131.6	114.0
	40～50	6,493	13,156	19,746	24,577	22,946	25,496	121.9	106.9	101.6	108.3
	30～40	4,422	10,663	17,068	22,874	23,178	25,051	83.0	92.4	102.6	106.4
	20～30	5,546	12,281	17,493	21,428	20,786	22,608	104.1	94.7	92.0	96.1
	15～20	4,833	11,267	19,163	24,147	23,129	24,443	109.5	103.7	102.4	103.9
	10～15	4,975	11,007	16,557	20,748	20,062	20,613	93.4	89.6	88.8	87.6
							(東 西 比 較)				
東 日 本	50万～	3,877	8,922	14,605	17,828	17,141	16,411	77.4	65.6	57.7	61.2
	40～50	2,767	8,219	12,715	17,485	17,697	18,497	42.6	64.4	77.1	72.5
	30～40	4,236	10,318	16,742	21,155	20,039	21,288	95.8	98.1	86.5	85.0
	20～30	5,074	10,031	14,512	18,170	17,078	19,073	91.5	83.0	82.2	84.4
	15～20	4,187	10,173	16,929	21,448	20,670	22,173	86.6	88.3	89.4	90.7
	10～15	4,024	9,539	14,436	17,746	16,912	17,269	80.9	87.2	84.3	83.8
西 日 本	50万～	5,660	14,904	26,077	35,516	36,903	36,318	112.9	117.1	124.2	135.4
	40～50	7,711	17,758	27,540	35,409	30,767	35,235	118.8	139.5	134.1	138.2
	30～40	4,777	11,131	17,457	24,942	27,455	29,964	108.0	102.3	118.4	119.6
	20～30	6,247	14,804	23,511	29,117	29,249	30,321	112.6	134.4	140.7	134.1
	15～20	6,584	13,822	25,024	31,686	30,328	31,320	136.2	130.6	131.1	128.1
	10～15	6,184	13,593	20,618	26,705	26,485	27,235	124.3	124.5	132.0	132.1

にはいずれも同じ程度の東西の開きを続けるが、47年では小都市の格差の方が大きかった。小都市を5万以上と5万以下に分けると、5万以上での東西の開きが大きい。

中都市についても人口規模別に東西の関係を見ておこう。50万以上での水準の高さ、10万以上の水準の低さがあり、その他においても時期による水準の変化もある多様な展開があり、それは社会関係費の多様な展開に類似するが、それぞれの東西関係を見ると、水準の多様さにもかかわらず、西高東低の関係はほぼ固まっていると見てよい推移であり、30万以上と15万以上で多少開きの緩い状況がある。ここでも格差の程度については変動があるものの、

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第101表 1人当り都市扶助費推移(3)(地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		5,327	11,968	18,476	23,475	22,591	23,533	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	9,292	18,138	27,743	35,853	38,828	42,860	174.4	150.2	171.9	182.1
	東 北	5,883	12,655	18,656	23,171	22,289	23,080	110.4	101.0	98.7	98.1
	関 東	3,329	8,192	12,829	16,344	15,622	16,346	62.5	69.4	69.2	69.5
	北 陸	4,833	11,259	16,847	21,269	18,433	19,543	90.7	91.2	81.6	83.0
	東 海	3,696	8,841	13,536	17,033	14,768	15,260	69.4	73.3	65.4	64.8
	計	4,384	9,989	15,223	19,208	18,069	18,889	82.3	82.4	80.0	80.3
西 日 本	近 畿	4,615	11,118	18,168	24,342	24,247	26,096	86.6	98.3	107.3	110.9
	中 国	6,394	13,753	22,050	27,818	26,201	28,040	120.0	119.3	116.0	119.1
	四 国	7,798	17,617	27,587	34,308	33,512	34,563	146.4	149.3	148.3	146.9
	九 州	9,818	20,824	31,271	39,684	39,577	39,750	184.3	169.2	175.2	168.9
	計	6,729	14,925	23,409	30,248	29,287	31,111	126.3	126.7	132.0	132.2
(東京圏 大阪圏)	東 京 圏	3,194	7,865	12,409	15,886	15,457	16,251	60.0	67.2	68.4	69.1
	大 阪 圏	4,610	11,058	18,219	24,610	24,621	26,461	86.5	98.6	109.0	112.4

人口規模別条件の展開は、それが同一都市を対象とした集団の推移の比較ではないことを考えれば、この変動の多様さはむしろ当然とすることもできる。

大都市の東西格差を個々の都市について明らかにすることを略して一般都市の地方別状況の検討から始めよう。東日本の低位は各地方がなべて低いというのではなく、北海道は明白な高位であり、東北は全国平均の高さであり、北陸も低いとは言えない。関東と東海の低さが東の低位を作り出す。これに対して西は九州、四国が北海道と同様に明白な高位であり、中国も全国平均を上回る高位を持続し、近畿もその水準を高める方向で、50年台後半には西のすべての地方が全国水準を上回ることになって西の高位を固め、東西の開きを増大させた。東京圏と大阪圏を対比して見ると、47年度はなお両者とも低位にあったが、大阪圏の持続的上昇によって62年度では大阪圏は東京圏を6割以上も上回る高位となった。

一般都市の状況を念頭に中都市と小都市についても地方別の状況を見てお

第102表 1人当り都市扶助費推移(4) (地方別, 中都市) (単位: 円, %)

昭和年度 地域		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
全 国		5,179	11,615	18,201	23,252	22,771	23,849	100	100	100	100
東 日 本	北海道	9,314	17,467	27,321	35,620	39,690	45,048	179.8	150.1	174.3	188.9
	東北	5,939	12,514	18,483	22,375	21,949	22,765	114.7	101.5	96.4	95.5
	関東	3,300	7,938	12,516	16,020	15,442	16,393	63.7	68.8	67.8	68.7
	北陸	4,875	11,501	17,492	22,411	19,779	21,161	94.1	96.1	86.9	88.7
	東海	3,811	9,137	13,799	17,437	15,490	16,059	73.6	75.8	68.0	67.3
計		4,361	9,782	14,970	18,958	18,125	19,100	84.2	82.2	79.6	80.1
西 日 本	近畿	4,634	11,281	18,739	25,342	25,742	27,510	89.5	103.0	113.0	115.4
	中国	6,213	13,661	22,436	28,601	27,362	29,310	120.0	123.3	120.2	122.9
	四国	7,005	16,591	27,115	34,095	34,397	35,792	135.2	149.0	151.1	150.1
	九州	9,245	19,667	30,783	40,296	40,911	41,508	178.5	169.1	179.7	174.0
	計	6,249	14,163	22,947	30,115	30,361	31,797	120.7	126.1	133.3	133.3
(東京圏)		3,130	7,593	12,034	15,483	15,265	16,242	60.4	66.1	67.0	68.1
(大阪圏)		4,623	11,172	18,687	25,422	25,896	27,622	89.3	102.7	113.7	115.8

第103表 1人当り都市扶助費推移(5) (地方別, 小都市) (単位: 円, %)

昭和年度 地域		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
全 国		5,543	12,533	18,957	23,875	22,250	22,908	100	100	100	100
東 日 本	北海道	9,267	19,079	28,345	36,252	37,334	39,093	167.2	149.5	167.8	170.0
	東北	5,818	12,825	18,903	24,398	22,822	23,588	105.0	99.7	102.6	103.0
	関東	3,374	8,672	13,462	17,060	15,945	16,214	60.9	71.0	71.7	70.8
	北陸	4,790	10,974	16,076	19,911	16,787	17,541	86.4	84.8	75.4	76.6
	東海	3,571	8,471	13,109	16,373	13,610	13,923	64.4	69.2	61.2	60.8
計		4,413	10,295	15,650	19,660	17,961	18,457	79.6	82.6	80.7	80.6
西 日 本	近畿	4,570	10,748	16,787	21,846	20,386	22,191	82.5	88.6	91.6	96.9
	中国	6,831	13,976	21,100	26,314	23,943	25,534	123.2	111.3	107.6	111.5
	四国	8,908	19,097	28,277	34,628	32,167	32,657	160.7	149.2	144.6	142.6
	九州	10,454	22,109	31,812	39,310	38,056	37,737	188.6	167.8	171.0	164.7
	計	7,584	16,290	24,258	30,484	28,852	29,785	136.8	128.0	129.7	130.0
(東京圏)		3,309	8,453	13,260	16,910	16,045	16,398	59.7	70.0	72.1	71.6
(大阪圏)		4,574	10,766	16,927	22,274	20,795	22,685	82.5	89.3	93.5	99.0

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第104表 1人当り都市扶助費推移(6)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指 数)				
全都市		25,503	26,371	27,343	27,812	27,900	116.5	116.7	117.0	118.0	118.6
{ 特別区		29,351	30,467	31,848	33,448	34,189	134.1	134.9	136.3	141.9	145.3
{ 大都市		38,689	40,038	41,585	42,672	42,999	176.8	177.2	178.0	181.1	182.7
{ 一般都市		21,886	22,591	23,369	23,566	23,533	100	100	100	100	100
{ 中都市		22,013	22,771	23,639	23,867	23,849	100.6	100.8	101.1	101.3	101.3
{ 小都市		21,651	22,250	22,853	22,984	22,908	98.9	98.5	97.8	97.5	97.3
{ 5~10万		20,129	20,540	21,125	21,285	21,140	92.0	90.9	90.4	90.3	89.8
{ 5万以下		24,370	25,355	26,084	26,201	26,230	111.3	112.2	111.6	111.2	111.5
							(東 西 比 較)				
東	大都市	25,220	26,485	27,900	28,890	29,126	65.2	66.1	67.1	67.7	67.7
{ 一般都市		17,532	18,069	18,625	18,835	18,889	80.1	80.0	79.7	79.9	80.3
{ 中都市		17,539	18,125	18,776	19,019	19,100	79.7	79.6	79.4	79.7	80.1
{ 小都市		17,519	17,961	18,330	18,473	18,457	80.9	80.7	80.2	80.4	80.6
{ 5~10万		16,430	16,672	17,055	17,239	17,063	81.6	81.2	80.7	81.0	80.7
{ 5万以下		19,707	20,646	21,095	21,236	21,557	80.9	81.4	80.9	81.1	82.2
西	大都市	50,679	52,042	53,815	55,028	55,734	131.0	130.0	129.4	129.0	129.6
{ 一般都市		28,832	29,287	30,989	31,218	31,111	131.7	132.0	132.6	132.5	132.2
{ 中都市		29,287	30,361	31,570	31,874	31,797	133.0	133.3	133.6	133.5	133.3
{ 小都市		28,018	28,852	29,909	29,997	29,785	129.4	129.7	130.9	130.5	130.0
{ 5~10万		26,470	27,272	28,362	28,569	28,426	131.5	132.8	134.3	134.2	134.5
{ 5万以下		30,341	31,198	32,234	32,112	31,535	124.5	123.0	123.6	122.6	120.2

きたい。中都市の地方別状況は一般都市総体の場合と大きく変わってはいない。差異を求めれば西の近畿と中国の水準上昇が見られる点であろう。小都市については幾分の差異があり、中都市との対比ではかなりの差異とすることができて、上記の近畿、中国は下降を示し、東では北海道と北陸が相対的に低いと見ることができる。しかし中都市と小都市で状況が異なっているというとらえ方を許すものではない。

近時の格差増大傾向を知るためにも是非58年度以降の毎年度の状況を見ておきたい。一般都市に対して見ると、特別区も大都市も持続的に支出水準を

第105表 1人当り都市扶助費推移(7) (中都市)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指数)				
一般都市		21,886	22,591	23,369	23,566	23,533	100	100	100	100	100
中都市	50万～	28,604	29,723	29,324	27,694	26,830	130.7	131.6	125.5	117.5	114.0
	40～50	23,024	22,946	23,988	25,254	25,496	105.2	101.6	102.7	107.2	108.3
	30～40	21,572	23,178	24,444	25,054	25,051	98.6	102.6	104.6	106.3	106.4
	20～30	20,115	20,786	21,902	22,485	22,608	91.9	92.0	93.7	95.4	96.1
	15～20	22,470	23,129	24,244	24,323	24,443	102.7	102.4	103.8	103.2	103.9
	10～15	19,451	20,062	20,537	20,665	20,613	88.9	88.8	87.9	87.7	87.6
							(東西比較)				
東日本	50万～	16,664	17,141	16,586	16,947	16,411	58.3	57.7	56.6	61.2	61.2
	40～50	17,457	17,697	18,458	18,313	18,497	75.8	77.1	76.9	72.5	72.5
	30～40	18,828	20,039	20,851	21,345	21,288	87.3	86.5	86.1	85.2	85.0
	20～30	16,599	17,078	18,245	18,888	19,073	82.5	82.2	83.3	84.0	84.4
	15～20	19,825	20,670	21,629	21,661	22,173	88.2	89.4	89.3	89.1	90.7
	10～15	16,475	16,912	17,271	17,390	17,269	84.7	84.3	84.1	84.2	83.8
西日本	50万～	35,366	36,903	38,483	36,799	36,318	123.6	124.2	131.2	132.9	135.4
	40～50	31,721	30,767	32,076	34,804	35,235	137.8	134.1	133.7	137.8	138.2
	30～40	25,193	27,455	29,231	29,883	29,964	116.8	118.4	120.6	119.3	119.6
	20～30	28,115	29,249	30,165	30,289	30,321	139.8	140.7	137.7	134.7	134.1
	15～20	29,905	30,328	31,550	31,790	31,320	133.1	131.1	130.2	130.7	128.1
	10～15	25,645	26,485	27,018	27,422	27,235	131.8	132.0	131.6	132.8	132.1

高めており、小都市に対する中都市の条件も持続的な水準差の開きとして見ることができる。しかし5万以上に対して5万以下の水準上昇の強さが目立って、これだけが従来の方向を変えている。また東西格差の条件は、わずかではあるが大都市で開きを緩めている。一般都市総体での格差が持続的であることを承けて、中都市と小都市に分けても、5万以上と5万以下とに分けても、東西の開きはほぼ持続していると見てよい。

ここでも中都市を人口規模別に見ておこう。58年度以降の毎年度の状況として見てもかなりの変化がある。50万以上では支出水準低下に動き、30万以上では逆に上昇に動いて平準化の方向にある。また東西関係について見ると、

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第106表 1人当り都市扶助費推移(8) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度						(指数)				
		58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
全 国		21,886	22,591	23,369	23,566	23,533	100	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	36,303	38,828	41,214	42,180	42,860	165.9	171.9	176.4	179.0	182.1
	東 北	21,490	22,289	23,026	23,096	23,080	98.2	98.7	98.5	98.0	98.1
	関 東	15,223	15,622	16,088	16,314	16,346	69.6	69.2	68.8	69.2	69.5
	北 陸	17,443	18,433	19,122	19,322	19,543	79.7	81.6	81.8	82.0	83.0
	東 海	14,560	14,768	14,971	15,094	15,260	66.5	65.4	64.1	64.1	64.8
	計	17,532	18,069	18,625	18,835	18,889	80.1	80.0	79.7	79.9	80.3
西 日 本	近 畿	23,450	24,247	25,615	26,054	26,096	107.1	107.3	109.6	110.6	110.9
	中 国	25,351	26,201	27,250	27,554	28,040	115.8	116.0	116.6	116.9	119.1
	四 国	32,034	33,512	34,792	34,615	34,563	146.4	148.3	148.9	146.9	146.9
	九 州	38,359	39,577	40,450	40,465	39,750	175.3	175.2	173.1	171.7	168.9
	計	28,832	29,287	30,989	31,218	31,111	131.7	132.0	132.6	133.5	132.2
(東京圏)	15,100	15,457	15,967	16,250	16,251	69.0	68.4	68.3	69.0	69.1	
(大阪圏)	23,843	24,621	25,967	26,451	26,461	108.9	109.0	111.1	112.2	112.4	

西高東低の基本条件は変わらないが、それぞれについて幾分かの格差条件の変化があって、その変化なりに中都市総体としてかなり大きな格差の西高東低の関係を作っている。

大都市の個別状況の把握を省略して、続いて一般都市の地方別状況を見よう。東西関係がかなりの開きを続けたことを念頭に各地方の状況をとらえると、東では軸となる関東の低位の条件は変わらないが、東海が低下を示し、北海道、東北、北陸が上昇して地方間の格差増大の方向にあり、西では九州が低下へ中国が上昇へと動いて、地方間の格差を縮めつつ高位を保っている。東京圏の横這いに対して大阪圏の微昇ということで、東西の開きが強まる方向を裏付けるものとなっている。

資料提示の意図を含めて、ここでも中都市と小都市に分けてそれぞれの地方別状況を示しておこう。中都市では東で北海道、西では近畿で指数の上昇を示すことができ、小都市では東で関東の低下、西で中国の上昇、九州の低

第107表 1人当り都市扶助費推移(9) (地方別, 中都市) (単位: 円, %)

昭和年度 地域							(指 数)				
		58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
全 国		22,013	22,771	23,639	23,867	23,849	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	36,915	39,690	43,021	44,250	45,048	167.7	174.3	182.0	185.4	188.9
	東北	21,200	21,949	22,762	22,850	22,765	96.3	96.4	96.3	95.7	95.5
	関東	15,042	15,442	16,008	16,273	16,393	68.3	67.8	67.7	68.2	68.7
	北陸	18,414	19,779	20,590	20,933	21,161	83.7	86.9	87.1	87.7	88.7
	東海	15,150	15,490	14,508	15,802	16,059	68.8	68.0	59.5	66.2	67.3
計		17,539	18,125	18,776	19,019	19,100	79.7	79.6	79.4	79.7	80.1
西 日 本	近畿	24,852	25,742	27,001	27,484	27,510	112.9	113.0	114.2	115.2	115.4
	中国	26,454	27,362	28,568	28,816	29,310	120.2	120.2	120.8	120.7	122.9
	四国	32,675	34,397	35,832	35,689	35,792	148.4	151.1	151.6	149.5	150.1
	九州	39,483	40,911	42,029	42,195	41,508	179.4	179.7	177.8	176.8	174.0
計		29,287	30,361	31,570	31,874	31,797	133.0	133.3	133.6	133.5	133.3
(東京圏)		14,825	15,265	15,792	16,118	16,242	67.3	67.0	66.8	67.5	68.1
(大阪圏)		25,045	25,896	27,099	27,624	27,622	113.8	113.7	114.6	115.7	115.8

第108表 1人当り都市扶助費推移(10) (地方別, 小都市) (単位: 円, %)

昭和年度 地域							(指 数)				
		58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
全 国		21,651	22,250	22,853	22,984	22,908	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	35,243	37,334	38,083	38,585	39,093	162.8	167.8	166.6	167.9	170.7
	東北	22,058	22,822	23,443	23,487	23,588	101.9	102.6	102.6	102.2	103.0
	関東	15,669	15,945	16,297	16,420	16,214	72.4	71.7	71.3	71.4	70.8
	北陸	16,206	16,787	17,320	17,446	17,541	74.9	75.4	75.8	75.9	76.6
	東海	13,586	13,610	13,774	13,910	13,923	64.0	61.2	60.3	60.5	60.8
計		17,519	17,961	18,330	18,473	18,457	80.9	80.7	80.2	80.4	80.6
西 日 本	近畿	19,971	20,386	21,877	22,202	22,191	92.2	91.6	95.7	96.6	96.9
	中国	23,216	23,943	24,676	25,076	25,534	107.2	107.6	108.0	109.1	111.5
	四国	31,063	32,167	33,202	32,964	32,657	143.5	144.6	145.3	143.4	142.6
	九州	37,078	38,056	38,640	38,483	37,737	171.3	171.0	169.1	167.4	164.7
計		28,018	28,852	29,909	29,997	29,785	129.4	129.7	130.9	130.5	130.0
(東京圏)		15,881	16,045	16,498	16,661	16,398	73.4	72.1	72.2	72.5	71.6
(大阪圏)		20,407	20,795	22,389	22,745	22,685	94.3	93.5	98.0	99.0	99.0

都市財政構造分析続論 (2) (西村)

第109表 1人当り都市補助費等推移(1)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
全 都 市		3,189	6,158	8,865	12,072	14,024	16,857	105.1	110.9	115.5	120.3
特 別 区		1,216	2,586	3,709	5,117	6,429	8,282	40.1	46.4	52.9	59.1
	大 都 市	5,024	9,696	15,624	21,078	25,697	32,953	165.5	195.5	211.6	235.2
一 般 都 市		3,035	5,819	7,992	10,782	12,146	14,009	100	100	100	100
中 都 市		2,569	4,904	6,613	8,996	10,157	11,926	84.6	82.7	83.6	85.0
小 都 市		3,718	7,282	10,400	13,989	15,908	18,133	122.5	130.1	131.0	129.4
5~10万		3,561	6,919	9,575	12,929	14,834	16,771	117.3	119.8	122.1	119.7
5万以下		3,912	7,814	11,715	15,765	17,860	20,692	128.9	146.6	147.0	147.7
								(東 西 比 較)			
東 日 本	大 都 市	5,362	9,431	14,606	21,430	29,409	35,371	106.7	93.5	114.4	107.3
	一 般 都 市	3,103	5,922	8,135	11,044	12,609	14,575	102.2	101.8	103.8	104.0
中 都 市		2,526	4,891	6,711	9,302	10,704	12,566	98.3	101.5	105.4	105.4
小 都 市		3,847	7,451	10,538	14,188	16,297	18,675	103.5	101.3	102.4	103.0
5~10万		3,591	7,047	9,623	12,995	15,266	17,196	100.8	100.5	102.9	102.5
5万以下		4,219	8,098	12,118	16,383	18,445	21,957	107.9	103.4	103.3	106.1
西 日 本	大 都 市	4,727	9,941	16,598	20,770	22,409	30,733	94.1	106.2	87.2	98.3
	一 般 都 市	2,935	5,666	7,775	10,366	11,406	13,092	96.7	97.3	93.9	93.5
中 都 市		2,626	4,923	6,469	8,507	9,265	10,854	102.2	97.8	91.2	91.0
小 都 市		3,484	6,997	10,180	13,676	15,310	17,294	93.7	97.9	96.2	95.4
5~10万		3,494	6,683	9,492	12,816	14,081	16,012	98.1	99.1	99.8	95.5
5万以下		3,476	7,397	11,143	14,927	17,134	19,189	88.9	95.1	95.9	92.7

下という条件を見る。しかし総じて大きな変化を示したわけではない。

(C) 補助費等の増大と東高条件の定着

目的別分類の諸経費との結びつきが明らかとならない補助費等が、構成比率を高める方向にある点を念頭に置いて検討したい。歳出構成では公債の比率上昇の下での補助費等の比率増大であり、昭和50年台では扶助費もその比率を下げる動きであった間に、その比率を高めた補助費等であることを重視したとらえ方をしたい。

第110表 1人当り都市補助費等推移(2) (中都市)

(単位：円，%)

昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
区分							(指 数)				
一般都市	3,035	5,819	7,992	10,782	12,146	14,009	100	100	100	100	
中 都 市	50万～	1,988	4,278	5,427	7,649	9,530	11,905	65.5	67.9	78.5	85.0
	40～50	2,231	4,735	6,217	7,533	8,327	9,363	73.5	77.8	68.6	66.8
	30～40	2,490	4,380	6,001	8,296	9,322	11,034	82.0	75.1	76.7	78.8
	20～30	2,789	5,063	6,484	8,878	9,633	11,761	91.9	81.1	79.3	84.0
	15～20	2,476	4,895	6,455	9,617	11,804	13,024	81.6	80.8	97.2	93.0
10～15	2,876	5,802	8,408	11,360	12,291	14,372	94.8	105.6	101.2	102.6	
							(東 西 比 較)				
東 日 本	50万～	1,497	3,146	4,185	5,901	9,471	12,575	75.3	77.1	99.4	105.6
	40～50	3,318	5,690	6,093	7,548	8,382	9,629	148.7	98.0	100.7	102.8
	30～40	2,144	3,566	5,733	8,732	10,296	12,566	86.1	95.5	110.4	113.9
	20～30	2,621	5,492	7,092	9,582	10,638	12,755	94.0	109.4	110.4	108.4
	15～20	2,433	4,881	6,342	9,713	11,924	12,806	98.3	98.3	101.0	98.3
西 日 本	10～15	3,083	5,597	8,215	11,332	12,344	14,451	107.2	97.7	100.4	100.5
	50万～	2,268	4,813	6,045	8,496	9,564	11,294	114.1	111.4	100.4	94.9
	40～50	1,875	3,844	6,353	7,511	8,246	8,994	84.1	102.2	99.0	96.1
	30～40	3,152	5,485	6,321	7,772	7,995	9,033	126.6	105.3	85.8	81.9
	20～30	3,039	4,309	5,257	7,216	7,338	9,594	108.9	81.1	76.2	81.6
15～20	2,591	4,928	6,750	9,347	11,454	13,687	104.7	104.6	97.0	105.1	
10～15	2,614	6,164	8,778	11,417	12,184	14,216	90.9	104.4	99.1	98.9	

住民一人当り額で全都市の補助費等を見ると、47年度の3,189円から56年度の1万2,072円へと3.8倍した後、62年度の1万6,857円へさらに1.4倍しており、47年度以降の伸びを総合すると既述の人員費、扶助費の伸びを大きく上回る。そこでこれを特別区、大都市、一般都市の相互関係で見ると、一般都市に対比して特別区は低位にあり、大都市は著しい高位にあるが、いずれもその相対的位置を高める方向で推移している。大都市の高位は下水道事業に係る。都市計画の実施に当って下水道普及に補助費が活用され、それが大都市の補助費等の半額にも及ぶことがその理由である。一方特別区についてはこの下水道の費用計上がないことが補助費等を小さくする理由でもある。

都市財政構造分析続論 (2) (西村)

第111表 1人当り都市補助費等推移(3) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	47	50	53	56	59	62	(指数)			
								47	53	59	62
全 国		3,035	5,819	7,992	10,782	12,146	14,009	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	3,522	6,852	10,768	13,672	16,089	20,790	116.0	134.7	132.5	148.4
	東 北	3,102	6,224	9,108	12,682	13,762	15,717	102.2	114.0	113.3	112.2
	関 東	2,933	5,462	7,175	9,790	11,408	12,661	96.6	89.8	93.9	90.4
	北 陸	2,930	5,641	8,286	11,407	12,864	14,631	96.5	103.7	105.9	104.4
	東 海	3,334	6,381	8,521	11,571	13,204	16,063	109.8	106.6	108.7	114.7
	計	3,103	5,922	8,135	11,044	12,609	14,575	102.2	101.8	103.8	104.0
西 日 本	近 畿	2,990	6,008	7,610	9,787	11,061	12,332	98.5	95.2	91.1	88.0
	中 国	3,500	6,033	8,566	11,634	13,314	15,921	115.3	107.2	109.6	113.7
	四 国	3,081	5,641	7,668	9,896	10,849	12,184	101.5	96.0	89.3	87.0
	九 州	2,373	4,855	7,475	10,243	10,975	12,882	78.2	93.5	90.4	92.0
	計	2,935	5,666	7,775	10,366	11,406	13,092	96.7	97.3	93.9	93.5
(東 京 圏 大 阪 圏)		2,894	5,364	6,888	9,417	11,116	11,988	95.3	86.2	91.5	85.6
		3,076	6,201	7,761	9,715	10,934	12,275	101.3	97.1	90.0	87.6

一般都市と中都市と小都市に分けてとらえ、さらにそれぞれを人口規模別に分けてとらえると、人口規模の小さい都市での支出水準が高い状況が展開する。この展開の軸は清掃事業の施行に関係しており、一部事務組合による実施に対する補助という方式がこの支出を大きくする。以上の関連で47年度以降の方向を見ると、大都市での伸びが大きく、また小都市、5万以下都市での伸びが大きい。上記の支出の条件の強化の過程ととらえることが許されよう。

そこで補助費等支出の東西関係を検討しよう。大都市ではこれまでの諸経費と様相を異にして、おおむね東高西低の関係にあり、土木費の西高東低の格差が緩む方向にあったことを想起させる。一般都市についても東の高位が続き、これを中都市と小都市に分け、さらに5万以上と5万以下に分けてとらえても、いずれにおいても東高西低の関係と見てよい。

高位の大都市と小都市の間にある中都市の内容を人口規模別の条件で見ても。上記の傾向を反映して50万以上と15万以上、10万以上と両極での

第112表 1人当り都市補助費等推移(4) (地方別, 中都市) (単位: 円, %)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)				
								47	53	59	62	
地 域												
全 国		2,569	4,904	6,613	9,015	10,157	11,926	100	100	100	100	
東 日 本	北 海 道	2,517	4,757	7,681	10,803	13,076	16,623	98.0	116.2	128.7	139.4	
	東 北	2,278	4,334	7,038	9,946	11,005	12,596	88.7	106.4	108.3	105.6	
	関 東	2,495	4,563	5,992	8,314	9,802	11,015	97.1	90.6	96.5	92.4	
	北 陸	2,475	4,712	6,892	9,647	10,605	12,173	96.3	104.2	104.4	102.1	
	東 海	2,761	5,953	7,616	10,443	11,840	15,187	107.5	115.2	116.6	127.3	
	計	2,526	4,891	6,711	9,302	10,704	12,566	98.3	101.5	105.4	105.4	
西 日 本	近 畿	2,730	5,653	6,988	8,770	9,824	11,068	106.3	105.7	96.7	92.8	
	中 国	3,387	5,367	7,289	9,407	11,040	13,860	131.8	110.2	108.7	116.2	
	四 国	2,468	4,155	5,135	6,683	7,596	8,277	96.1	77.7	74.8	69.4	
	九 州	1,716	3,267	5,062	7,129	7,387	9,150	66.8	76.6	72.7	76.7	
	計	2,626	4,923	6,469	8,507	9,265	10,854	102.2	97.8	91.2	91.0	
(東 京 圏 大 阪 圏)		2,495	4,618	5,874	8,166	9,790	10,629	97.1	88.8	96.4	89.1	
		2,847	5,904	7,269	8,998	10,092	11,346	110.8	109.9	99.4	95.1	

第113表 1人当り都市補助費等推移(5) (地方別, 小都市) (単位: 円, %)

昭和年度		47	50	53	56	59	62	(指 数)			
								47	53	59	62
地 域											
全 国		3,718	7,282	10,400	13,989	15,908	18,133	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	4,735	9,795	15,181	18,590	21,310	28,055	127.4	146.0	133.7	154.7
	東 北	4,069	8,470	12,041	16,897	18,082	20,749	109.5	115.8	113.5	114.4
	関 東	3,625	7,159	9,571	13,053	15,499	17,278	97.5	92.0	97.3	95.2
	北 陸	3,397	6,736	9,950	13,538	27,623	17,671	91.4	95.7	98.2	97.5
	東 海	3,959	6,915	9,995	13,413	15,389	17,529	106.5	96.1	96.6	96.7
	計	3,847	7,451	10,538	14,188	16,297	18,675	103.5	101.3	102.4	104.4
西 日 本	近 畿	3,586	6,817	9,111	12,327	14,257	15,824	96.5	87.6	89.5	87.3
	中 国	3,776	7,649	11,713	15,908	17,735	19,983	101.6	112.6	111.3	110.2
	四 国	3,938	7,787	11,376	14,702	15,799	18,238	105.9	109.4	99.3	100.6
	九 州	3,103	6,617	10,147	13,647	15,071	17,158	83.5	97.6	94.6	94.6
	計	3,484	6,997	10,180	13,676	15,310	17,294	93.7	97.9	96.2	95.4
(東 京 圏 大 阪 圏)		3,606	6,971	9,192	12,596	15,155	16,533	96.9	88.4	95.1	91.2
		3,669	6,967	9,121	11,777	13,458	15,298	98.7	87.7	84.5	84.4

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第114表 1人当り都市補助費等推移(6)

(単位：円, %)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指 数)				
全 都 市		13,451	14,024	14,726	15,694	16,857	115.0	115.5	117.4	119.5	120.3
{ 特別区		5,763	6,429	6,676	7,438	8,282	49.3	52.9	53.2	56.6	59.1
{ 大都市		24,762	25,697	27,845	30,459	32,953	211.8	211.6	222.0	231.9	235.2
{ 一般都市		11,692	12,146	12,544	13,136	14,009	100	100	100	100	100
{ 中都市		9,757	10,157	10,557	11,040	11,926	83.4	83.6	84.2	84.0	85.0
{ 小都市		15,275	15,908	16,340	17,186	18,133	130.6	131.0	130.3	130.8	129.4
{ 5~10万		14,160	14,834	15,184	15,966	16,771	121.1	122.1	121.0	121.5	119.7
{ 5万以下		17,269	17,860	18,503	19,495	20,692	147.7	147.0	147.5	148.4	147.7
							(東 西 比 較)				
東 日 本	{ 大都市	27,833	29,409	29,651	31,773	35,371	112.4	114.4	106.5	104.3	107.3
	{ 一般都市	12,007	12,609	12,975	13,589	14,575	102.7	103.8	103.4	103.4	104.0
	{ 中都市	10,127	10,704	10,989	11,513	12,566	103.8	105.4	104.1	104.3	105.4
	{ 小都市	15,559	16,297	16,832	17,694	18,675	101.9	102.4	103.0	103.0	103.0
	{ 5~10万	14,323	15,266	15,748	16,498	17,196	101.2	102.9	103.7	103.3	102.5
	{ 5万以下	18,044	18,445	19,182	20,370	21,957	104.5	103.3	103.7	104.5	106.1
西 日 本	{ 大都市	22,029	22,409	26,230	29,200	30,773	89.0	87.2	94.2	95.9	98.3
	{ 一般都市	11,190	11,406	11,853	12,405	13,092	95.7	93.9	94.5	94.4	93.5
	{ 中都市	9,154	9,265	9,851	10,261	10,855	93.8	91.2	93.3	92.9	91.0
	{ 小都市	14,838	15,310	15,573	16,397	17,294	97.1	96.2	95.3	95.4	95.4
	{ 5~10万	13,880	14,081	14,181	15,009	16,012	98.0	99.8	94.0	94.0	95.5
	{ 5万以下	16,276	17,134	17,666	18,453	19,189	94.3	95.9	95.5	94.7	92.7

水準上昇が示され、支出水準の開きが目立つ推移となっている。この条件の下で東西関係はどうなっているかを見ると、これは多様な展開となって型として把握できる状況ではない。それでも年を追うにしたがって東の高位が固まる方向を示している。

以上のような展開を念頭に地方別の状況を見よう。一般都市について見ると、東の高位は関東以外の各地方が全国平均を上回ることによっており、西の低位は近畿が低だけでなく、九州、四国も低いということがある。大阪圏の低下が東京圏の低下を上回って近時はほぼ同一水準となった。地方別状

第115表 1人当り都市補助費等推移(7) (中都市)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指数)				
一般都市		11,692	12,146	12,544	13,136	14,009	100	100	100	100	100
中都市	50万～	9,266	9,530	9,865	9,829	11,905	79.3	78.5	78.6	74.8	85.0
	40～50	7,675	8,327	8,879	8,875	9,363	65.6	68.6	70.8	67.6	66.8
	30～40	9,143	9,322	9,633	10,692	11,034	78.2	76.7	76.8	81.4	78.8
	20～30	9,149	9,633	10,065	11,043	11,761	78.2	79.3	80.2	84.1	84.0
	15～20	10,947	11,804	11,806	12,314	13,024	93.6	97.2	94.1	93.7	93.0
	10～15	12,134	12,291	12,885	13,085	14,372	103.8	101.2	102.7	99.6	102.6
							(東西比較)				
東日本	50万～	8,528	9,471	9,391	8,619	12,575	92.0	99.4	95.2	87.7	105.6
	40～50	7,908	8,382	9,038	8,915	9,629	103.0	100.7	101.8	100.4	102.8
	30～40	9,587	10,296	10,757	12,250	12,567	104.9	110.4	111.7	114.6	113.9
	20～30	10,079	10,638	11,084	12,113	12,755	110.2	110.4	110.1	109.7	108.4
	15～20	10,764	11,924	11,618	12,261	12,806	98.3	101.0	98.4	99.6	98.3
	10～15	12,201	12,344	12,689	13,067	14,451	101.0	100.4	98.5	99.9	100.5
西日本	50万～	9,684	9,564	10,205	10,854	11,294	104.5	100.4	103.5	110.4	94.9
	40～50	7,310	8,246	8,646	8,821	8,994	95.2	99.0	97.4	99.4	96.1
	30～40	8,557	7,995	8,135	8,665	9,033	93.6	85.8	84.5	81.0	81.9
	20～30	7,033	7,338	7,763	8,719	9,594	76.9	76.2	77.1	79.0	81.6
	15～20	11,469	11,454	12,333	12,465	13,687	104.8	97.0	104.5	101.2	105.1
	10～15	11,995	12,184	13,274	13,445	14,216	98.9	99.1	103.0	102.8	98.9

況については中都市，小都市でも見ておきたい。両者の比較で状況を見ると，人口停滞地域での小都市の水準が高いことを反映した展開がある。北海道，東北，四国，九州で，中都市よりも小都市で高い指数となっている。

続いて近時の傾向を知るために58年度以降の毎年度の推移を見る。着実な支出水準上昇であり，一般都市に対する条件では特別区，大都市の伸びが大きい。しかし一般都市を中都市と小都市の対比で見ると，支出増大のテンポは中都市が小都市を上回る動きに転じている。また小都市を5万以上と5万以下の対比で見ると，支出水準の開きは残るものの，5万以下の伸びが大きかったという流れは止まって，開きを変えるような傾向的な展開はない。と

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第116表 1人当り都市補助費等推移(8)(地方別, 一般都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全 国		11,692	12,146	12,544	13,136	14,009	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	14,854	16,089	16,256	17,296	20,790	127.0	132.5	129.6	131.7	148.4
	東北	13,122	13,762	14,332	14,853	15,717	112.2	113.3	114.3	113.1	112.2
	関東	10,688	11,408	11,623	12,198	12,661	91.4	93.9	92.7	92.9	90.4
	北陸	12,194	12,864	13,765	14,081	14,631	104.3	105.9	109.7	107.2	104.4
	東海	12,897	13,204	13,614	14,404	16,063	110.3	108.7	108.5	109.7	114.7
	計	12,007	12,609	12,975	13,589	14,575	102.7	103.8	103.4	103.4	104.0
西 日 本	近畿	10,920	11,061	11,378	11,851	12,332	93.4	91.1	90.7	90.2	88.0
	中国	13,148	13,314	14,089	14,862	15,921	112.5	109.6	112.3	113.1	113.7
	四国	10,782	10,849	11,171	11,467	12,184	92.2	89.3	89.1	87.3	87.0
	九州	10,555	10,975	11,475	12,113	12,882	90.3	90.4	91.5	92.2	92.0
	計	11,190	11,406	11,853	12,405	13,092	95.7	93.9	94.5	94.4	93.5
(東京圏)	10,202	11,116	11,273	11,590	11,988	87.3	91.5	89.9	88.2	85.6	
(大阪圏)	10,840	10,934	11,328	11,738	12,275	92.7	90.0	90.3	89.4	87.6	

第117表 1人当り都市補助費等推移(9)(地方別, 中都市) (単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指数)				
							58	59	60	61	62
全 国		9,757	10,157	10,557	11,040	11,926	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	11,890	13,076	13,045	13,838	16,623	121.9	128.7	123.6	125.3	139.4
	東北	10,254	11,005	11,500	11,834	12,596	105.1	108.3	108.9	107.2	105.6
	関東	9,188	9,802	9,960	10,503	11,015	94.2	96.5	94.3	95.1	92.4
	北陸	9,947	10,605	11,381	11,939	12,173	101.9	104.4	107.8	108.1	102.1
	東海	11,518	11,840	12,306	12,833	15,187	118.1	116.6	116.6	116.2	127.3
	計	10,127	10,704	10,989	11,513	12,566	103.8	105.4	104.1	104.3	105.4
西 日 本	近畿	9,718	9,824	10,392	10,684	11,068	99.6	96.7	98.4	96.8	92.8
	中国	11,106	11,040	11,862	12,541	13,860	113.8	108.7	112.4	113.6	116.2
	四国	7,415	7,596	7,543	7,709	8,277	76.0	74.8	71.5	69.8	69.4
	九州	7,170	7,387	8,080	8,636	9,150	73.5	72.7	76.5	78.2	76.7
	計	9,154	9,265	9,851	10,261	10,855	93.8	91.2	93.3	92.9	91.0
(東京圏)	8,960	9,790	9,864	10,192	10,629	91.8	96.4	93.4	92.3	89.1	
(大阪圏)	10,027	10,092	10,645	10,399	11,346	102.8	99.4	100.8	94.2	95.1	

第118表 1人当り都市補助費等推移⁽¹⁰⁾ (地方別, 小都市)

(単位: 円, %))

昭和年度							(指 数)				
		58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
地 域											
全 国		15,275	15,908	16,340	17,186	18,133	100	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	19,989	21,310	21,820	23,302	28,055	130.9	133.7	133.5	135.6	154.7
	東 北	17,591	18,082	8,910	19,642	20,749	115.2	113.5	54.5	114.3	114.4
	関 東	14,388	15,499	15,966	16,660	17,278	94.2	97.3	97.7	96.9	95.2
	北 陸	15,054	27,623	16,691	16,717	17,671	98.6	98.2	102.1	97.3	97.5
	東 海	15,116	15,389	15,714	17,033	17,529	99.0	96.6	96.2	99.1	96.7
	計	15,559	16,297	16,832	17,694	18,675	101.9	102.4	103.0	103.0	103.0
西 日 本	近 畿	13,903	14,257	14,035	14,996	15,824	91.0	89.5	85.9	87.3	87.3
	中 国	17,103	17,735	18,440	19,421	19,986	112.0	111.3	112.9	113.0	110.2
	四 国	15,879	15,799	16,718	17,245	18,238	103.9	99.3	102.3	100.3	100.6
	九 州	14,412	15,071	15,364	16,094	17,158	94.3	94.6	94.0	93.6	94.6
	計	14,838	15,310	15,573	16,397	17,294	97.1	96.2	95.3	95.4	95.4
(東 京 圏 大 阪 圏		13,725	15,155	15,571	15,954	16,533	89.9	95.1	95.3	92.8	91.2
		13,164	13,458	13,487	14,263	15,298	86.2	84.5	82.5	83.0	84.4

ころでこの推移に当って東西の関係はどうか。大都市は格差を緩める動きであるが、一般都市は東高西低の関係を強める動きとなっている。この方向は中都市での条件によるものではなく、小都市の条件によっており、小都市の東の高位はかなり明確なものとなっている。5万以上と5万以下についてはいずれも東の高位を固める動きである。

中都市を人口規模別に見ると、毎年度の動きとしても多様な展開があつて型らしいものを求めるのはむづかしい。もとよりそれぞれに理由のある動きであるが、個々の説明は省略して表示に止める。

58年度以降での地方別状況の推移を見る。一般都市の傾向的な東高の条件は、各地方ごとの傾向的な動きの結果ではなく、61年度までの微変の後62年度の大きな変化によっており、西については近畿の傾向的な低下による低位の明確化と見ることが出来る。続いて中都市と小都市に分けた状況について見ると、いずれも61年度まで条件持続の後に62年度に変わるという動きである

が、その程度は中都市により強く示されるとすべきであろう。個々の説明は略して表示に譲る。

(D) 普通建設事業費の東西関係逆転

性質別分類の最大項目の普通建設事業費の検討に入る。農林水産業費、土木費、教育費の状況からすれば、普通建設事業費の推移は当然西高東低の関係から東高西低へと転換したであろうし、一般都市に対して特別区の低位、大都市の高位があって、それぞれに水準を高める推移となろうと推量できる。問題はその程度の確認ということになるだろうか。

全都市の普通建設事業費の一人当り額は昭和47年度の2万2,022円から56年度の5万9,810円へ2.7倍したが、その後伸びは止って62年度の6万5,187円へわずか9%増でしかない。59年度は56年度よりも低額である。この間56年度以降で特別区も大都市も支出水準を高めており、一般都市の伸びが止って62年度でようやく56年度の支出水準を保つに止っている。この停滞状況を中都市と小都市に分けて見ると、中都市は伸びを残すものの小都市はむしろ減額の方角にある。この低落は5万以下ではなく5万以上に明確に示される。

以上を東西関係で見ると、大都市はまさに格差を縮める過程であり、一般都市は東高西低を固める過程と言える。東高西低は中都市で著しく、小都市はなおわずかに西の高位を残す。その小都市でも5万以上と5万以下に分けるとそれぞれの動きがある。5万以上では西高の条件が強く示されていたのに、62年度は東が高位となる。5万以下ではそれこそわずかに西高で持続しているが、59年度に東高、62年度は西高という変化を見せる。

中都市の状況を見る。人口規模別にとらえると、47年度以降の推移でかなり水準の差のあった状況が平準化へと動く。これを東西の関係で見ると多様な展開はあるものの結局はいずれも東高西低に落ち着いており、50万以上を例外としてその格差も接近する方向に動く。西高東低から東高西低への動きと見てよい。

続いて地方別の状況推移を見よう。大都市の個別条件解明を省略して一般

第119表 1人当り都市普通建設事業費推移(1)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指 数)			
全都市		22,022	33,004	50,841	59,810	57,432	65,187	103.6	102.0	103.8	107.6
特別区		11,751	17,423	22,978	30,090	35,236	47,555	55.3	46.1	63.7	78.5
	大都市	31,426	49,813	70,892	77,464	77,513	93,002	147.8	142.2	140.1	153.5
一般都市		21,259	31,200	49,853	59,275	55,313	60,598	100	100	100	100
中都市		20,534	29,921	46,420	54,921	51,968	58,554	97.3	93.1	94.0	96.6
小都市		22,319	33,203	55,848	67,070	61,641	64,645	105.0	112.0	111.4	106.7
5~10万		22,702	32,638	53,529	63,475	57,807	59,429	106.8	107.4	104.5	98.1
5万以下		21,848	34,137	59,539	73,097	68,604	74,451	102.8	119.4	124.0	122.9
								(東西比較)			
東日本	大都市	26,546	39,417	59,422	69,902	74,192	87,758	84.5	83.8	95.7	94.4
	一般都市	21,022	30,628	49,635	60,573	56,841	62,874	98.9	99.6	102.8	103.8
	中都市	20,362	29,383	46,510	57,645	54,315	62,399	99.2	100.2	104.5	106.6
	小都市	21,872	32,470	54,909	65,855	61,731	63,842	98.0	98.3	100.1	98.8
	5~10万	22,048	31,727	52,301	61,993	57,387	59,809	97.1	97.7	99.3	100.6
	5万以下	21,616	33,659	59,412	72,962	70,778	72,793	98.9	99.8	103.2	97.8
西日本	大都市	35,717	59,379	81,854	84,077	80,455	97,816	113.7	115.5	103.8	105.2
	一般都市	21,611	32,059	50,183	57,214	52,869	56,868	101.7	100.7	95.6	93.8
	中都市	20,760	30,700	46,289	50,567	48,134	52,118	101.1	99.7	92.6	89.0
	小都市	23,128	34,548	57,355	68,976	61,503	65,885	103.6	102.7	99.8	101.9
	5~10万	24,169	34,319	55,667	66,017	58,539	58,750	106.5	104.0	101.3	98.9
	5万以下	22,175	34,839	59,718	73,280	65,905	76,422	101.5	100.3	96.1	102.6

都市から始めよう。西高から東高への逆転過程は、東では関東を除く各地方の水準上昇が目立ち、関東は低下傾向にある。西についても近畿以外の各地方の水準上昇があり、近畿が低下の方向にある。同じ型のようにあるが、西の上昇は東より鈍く、西の低落が東より大きかったことが東の高位への転換となっている。東京圏と大阪圏の条件がこの関係を端的に表現する。その動きは土木費での動きより明確であり、両者の格差も大きい。

中都市と小都市では状況が異なるのでそれを見よう。東西関係の逆転が中都市によく現われているのでそれから見ると、東の高位への転換は関東以外

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第120表 1人当り都市普通建設事業費推移(2)(中都市)

(単位:円,%)

区分	昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62
								(指数)			
一般都市		21,259	31,200	49,853	59,275	55,313	60,598	100	100	100	100
中都市	50万～	22,293	32,715	45,893	50,105	50,817	61,906	104.9	92.0	91.9	102.2
	40～50	17,363	23,234	48,056	56,004	52,212	56,887	81.7	96.4	94.4	93.9
	30～40	20,294	30,805	45,556	52,969	51,236	60,084	95.5	91.4	92.6	99.2
	20～30	20,700	27,800	47,541	57,752	52,555	58,623	97.4	95.3	95.0	96.7
	15～20	21,014	32,726	40,469	52,392	52,264	58,091	98.8	81.2	94.5	95.9
	10～15	21,047	32,653	47,992	56,771	52,232	57,045	99.0	96.2	94.4	94.1
								(東西比較)			
東日本	50万～	21,418	31,460	40,401	50,353	57,499	78,241	96.1	88.0	113.1	126.4
	40～50	23,452	25,192	49,352	58,659	54,522	57,524	135.1	102.7	104.4	101.1
	30～40	20,015	28,727	47,076	57,621	50,357	63,989	98.6	103.4	98.3	106.5
	20～30	19,537	28,423	47,912	59,767	54,464	62,701	94.4	100.8	103.7	107.0
	15～20	20,257	31,103	40,815	55,264	55,168	61,102	96.4	100.9	105.6	105.2
	10～15	21,265	31,605	47,337	57,766	55,131	58,852	101.0	98.6	105.5	103.2
西日本	50万～	22,793	33,308	48,624	49,984	47,005	47,031	102.2	106.0	92.5	76.0
	40～50	15,373	21,408	46,619	51,949	48,769	56,000	88.5	97.0	93.4	98.4
	30～40	20,828	33,624	43,745	47,371	52,433	54,984	102.6	96.0	102.3	91.5
	20～30	22,425	26,707	46,790	52,997	48,197	49,724	108.3	98.4	91.7	84.8
	15～20	23,196	36,517	39,563	44,370	43,762	48,967	110.4	97.8	83.7	84.3
	10～15	20,771	34,500	49,247	54,799	46,323	53,468	98.7	102.6	88.7	93.7

の各地方の水準上昇があり、62年度の東海の上昇は際立っているが、これに合わせて関東の低下が微小であった点に特色がある。西では四国、九州での上昇もあるが、近畿の低落がありその著しさが目立つ。これに対して小都市では、東については関東以外の各地方の水準上昇も大きい、関東の低落の著しさが目立つ。一方西については中国、九州の上昇が著しいのに加えて、近畿の低落も中都市ほどの著しさではない。この東西の動きの中都市との差が、小都市での東西のバランスが保たれた理由となる。東京圏と大阪圏の動きもこの状況を裏付けるように、両者とも低落傾向を示す過程での差異を求めることはむづかしい。

第121表 1人当り都市普通建設事業費推移(3) (地方別, 一般都市) (単位: 円, %) (指 数)

地 域	昭和年度						(指 数)				
	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
全 国	21,259	31,200	49,853	59,275	55,313	60,598	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	20,813	33,461	56,511	73,875	63,346	70,112	97.9	113.4	114.5	115.7
	東北	18,266	27,895	48,809	59,631	55,292	62,862	85.8	97.9	87.3	103.7
	関東	21,847	31,768	46,182	56,227	52,997	57,772	102.8	92.6	95.8	95.3
	北陸	19,819	28,580	52,457	66,978	64,056	63,658	93.2	105.2	101.1	105.0
	東海	21,825	30,270	53,438	63,319	60,659	70,665	102.7	107.2	109.7	116.6
計	21,022	30,628	49,635	60,573	56,841	62,874	98.9	99.6	102.8	103.8	
西 日 本	近畿	25,054	37,088	46,898	52,800	49,633	48,885	117.9	94.1	89.7	80.7
	中国	19,765	30,315	53,641	59,354	51,753	61,809	93.0	107.6	93.6	102.0
	四国	20,869	29,075	56,234	67,504	61,950	70,632	98.2	112.8	97.8	116.6
	九州	17,533	26,597	50,572	59,172	55,439	61,811	82.5	101.4	100.2	102.0
計	21,611	32,059	50,183	57,214	52,869	56,868	101.7	100.7	95.6	93.8	
東京圏	22,247	32,809	44,357	54,178	51,215	55,228	104.7	89.0	92.6	91.1	
大阪圏	25,738	36,716	44,306	50,615	47,716	47,269	121.1	88.9	86.3	78.0	

第122表 1人当り都市普通建設事業費推移(4) (地方別, 中都市) (単位: 円, %) (指 数)

地 域	昭和年度						(指 数)				
	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
全 国	20,534	29,921	46,420	54,921	51,968	58,554	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	17,113	24,518	44,101	66,433	53,944	56,005	83.3	95.0	103.8	95.6
	東北	17,172	25,895	42,637	54,776	52,481	64,251	83.6	91.8	101.0	109.7
	関東	21,408	32,213	44,718	55,295	52,523	58,818	104.3	96.3	101.1	100.5
	北陸	19,737	27,443	48,157	62,168	60,322	59,387	96.1	103.7	116.1	101.4
	東海	21,532	27,745	52,231	60,313	57,037	72,017	104.9	112.5	109.8	123.0
計	20,362	29,383	46,510	57,645	54,315	62,399	99.2	100.2	104.5	106.6	
西 日 本	近畿	24,243	36,763	43,404	47,594	46,164	45,637	118.1	93.5	88.8	77.9
	中国	20,486	30,718	53,338	53,761	46,373	57,391	99.8	114.9	89.2	98.0
	四国	16,646	21,444	47,976	61,559	58,939	65,025	81.1	103.4	113.4	111.1
	九州	15,665	21,786	44,516	49,959	49,332	57,154	76.3	95.9	94.9	97.6
計	20,760	30,700	46,289	50,567	48,134	52,118	101.1	99.7	92.6	89.0	
東京圏	21,407	38,867	42,749	52,761	50,868	56,413	104.2	92.1	97.9	96.3	
大阪圏	25,011	36,658	42,632	47,010	44,863	44,205	121.8	91.8	86.3	75.5	

都市財政構造分析続論 (2) (西村)

第123表 1人当り都市普通建設事業費推移(5) (地方別, 小都市)

(単位: 円, %)

地 域	昭和年度						(指 数)				
	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
全 国	23,319	33,203	55,848	67,070	61,641	64,645	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	25,280	46,020	74,250	86,627	79,638	94,778	113.3	132.9	129.2	146.6
	東北	19,550	30,296	57,558	67,112	59,697	60,623	87.6	103.1	96.9	93.8
	関東	22,539	30,930	49,147	58,288	53,733	54,839	101.0	88.0	87.2	84.8
	北陸	19,904	29,919	57,594	72,891	68,622	68,940	89.2	103.1	111.3	106.6
	東海	22,145	33,426	55,404	68,228	66,463	68,402	99.2	99.2	107.8	105.8
計	21,872	32,470	54,909	65,855	61,731	63,842	98.0	98.3	100.1	98.8	
西 日 本	近畿	26,911	37,826	55,341	65,806	58,598	57,857	120.6	99.1	95.1	89.5
	中国	20,156	29,336	54,389	70,091	62,210	70,524	90.3	97.4	100.9	109.1
	四国	26,779	40,091	68,322	76,394	66,531	79,322	120.0	122.3	107.9	122.7
	九州	19,606	31,936	57,278	69,243	62,413	67,147	87.8	102.6	101.3	103.9
計	23,128	34,548	57,355	68,976	61,503	65,885	103.6	102.7	99.8	101.9	
(東京圏 大阪圏)	東京圏	23,743	32,684	48,012	57,783	52,274	51,654	106.4	86.0	84.8	79.8
	大阪圏	27,628	36,866	48,936	60,995	56,277	57,235	123.8	87.6	91.3	88.5

ここでも近時の状況をよく知るために58年度以降の毎年度の推移を見ることにしたい。特別区、大都市の水準上昇は傾向的で一般都市の動きを上回るが、一般都市は61年度まで横這いの推移の後で62年度に急上昇している。中都市、小都市の推移も一般都市に準じた動きであるが、中都市と小都市の水準の開きが接近する過程でもある。ところが小都市を5万以上と5万以下に分けると、両者の水準の開きは拡大する方向と見ることができる。

ところで東西関係はどうか。大都市は61年度まで東高への動きであったのが、62年度に突如西高東低となった。これに対して一般都市の東高条件は傾向的であり、それは中都市によって支えられていると言える。小都市はほぼバランスしているが、強いて言えば西高東低をようやく保っているという関係である。5万以上と5万以下に分けて見ると、分けたことの意味を見つけないことができないほどの類似の状況である。60年度に5万以上で西の高位が示された点に差があると言えよう。

第124表 1人当り都市普通建設事業費推移(6)

(単位：円，%)

区分	昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
							(指数)				
全都市		57,979	57,432	57,827	59,685	65,187	103.6	103.8	104.5	106.7	107.6
特別区		38,528	35,236	36,867	41,595	47,555	68.8	63.7	66.6	74.4	78.5
	大都市	76,331	77,513	78,654	84,383	93,002	136.4	140.1	142.1	150.9	153.5
一般都市		55,978	55,313	55,355	55,932	60,598	100	100	100	100	100
中都市		53,048	51,968	52,508	53,559	58,554	94.8	94.0	94.9	95.8	96.6
小都市		61,402	61,641	60,793	60,517	64,645	109.7	111.4	109.8	108.2	106.7
5~10万		58,534	57,807	56,624	56,976	59,429	104.6	104.5	102.3	101.9	98.1
5万以下		66,528	68,604	68,590	67,221	74,451	118.8	124.0	123.9	120.2	122.9
							(東西比較)				
東 日 本	大都市	75,104	74,192	77,961	84,835	87,758	98.4	95.7	99.1	100.5	94.4
	一般都市	57,194	56,841	56,041	57,632	62,874	102.2	102.8	101.2	103.0	103.8
	中都市	55,019	54,315	54,449	56,808	62,399	103.7	104.5	103.7	106.1	106.6
	小都市	61,305	61,731	59,135	59,261	63,842	99.8	100.1	97.3	97.9	98.8
	5~10万	58,490	57,387	54,952	56,362	59,809	99.9	99.3	97.0	98.9	100.6
	5万以下	66,961	70,778	68,204	65,751	72,793	100.7	103.2	99.4	97.8	97.8
西 日 本	大都市	77,423	80,455	79,274	83,780	97,816	101.4	103.8	100.8	99.3	105.2
	一般都市	54,038	52,869	54,254	53,183	56,868	96.5	95.6	98.0	95.1	93.8
	中都市	49,844	48,134	49,344	48,194	52,118	94.0	92.6	94.0	90.0	89.0
	小都市	61,553	61,503	63,380	62,471	65,885	100.2	99.8	104.3	103.2	101.9
	5~10万	58,609	58,539	59,597	58,081	58,750	100.1	101.3	105.3	101.9	98.9
5万以下	65,972	65,905	69,066	68,972	76,422	99.2	96.1	100.7	102.6	102.6	

変化のあった中都市について人口規模別に見よう。その推移は平準化としての過程であるが、62年度に突如変っている。50万以上の急上昇と40万以上の下降である。ところで東西関係を見ると、人口規模の小さい都市では着実に東高西低へと推移するが、規模が大きくなるにしたがって都市数が少なくなることもあって、関係の条件が不安定となり、50万以上ではかなり大きな変動を示し、62年度の東の高位は突出している。

続いて地方別状況を見よう。一般都市総体では東高への動きは東海、東北での水準上昇としてとらえ得ようし、西低への動きは近畿の水準の低下によ

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第125表 1人当り都市普通建設事業費推移(7)(中都市)

(単位:円,%)

区分	昭和年度										
	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62	
一般都市	55,978	55,313	55,355	55,932	60,598	100	100	100	100	100	
中都市	50万~	50,058	50,817	50,675	53,007	61,906	89.4	91.9	91.5	94.8	102.2
	40~50	54,391	52,212	55,086	54,204	56,887	97.2	94.4	99.5	96.9	93.9
	30~40	51,914	51,236	53,838	54,250	60,084	92.7	92.6	97.3	97.0	99.2
	20~30	54,822	52,555	50,774	54,551	58,623	97.9	95.0	91.7	97.5	96.7
	15~20	49,602	52,264	53,341	52,885	58,091	88.6	94.5	98.2	94.6	95.9
	10~15	55,006	52,232	51,398	52,163	57,045	98.3	94.4	92.9	93.3	94.1
						(東西比較)					
東日本	50万~	57,566	57,499	52,650	58,875	78,241	115.0	113.1	103.9	111.1	126.4
	40~50	53,242	54,522	56,660	55,753	57,524	97.9	104.4	101.8	102.9	101.1
	30~40	51,781	50,357	54,033	57,104	63,989	99.7	98.3	100.4	105.3	106.5
	20~30	56,897	54,464	52,360	58,598	62,701	103.8	103.7	103.1	107.4	107.0
	15~20	51,303	55,168	58,096	56,872	61,102	103.4	105.6	106.9	107.5	105.2
	10~15	58,140	55,131	54,327	54,714	58,582	105.7	105.5	105.7	104.9	103.2
西日本	50万~	45,806	47,005	49,254	48,036	47,031	91.5	92.5	97.2	90.6	76.0
	40~50	56,185	48,769	53,660	52,073	56,000	103.3	93.4	97.4	96.1	98.4
	30~40	52,089	54,433	53,578	50,535	54,984	100.3	102.3	99.5	93.2	91.5
	20~30	50,102	48,197	47,189	47,770	49,724	91.4	91.7	92.9	83.9	84.8
	15~20	44,819	43,762	43,854	41,701	48,967	90.4	83.7	80.7	78.9	84.3
	10~15	48,482	46,323	45,586	46,899	53,468	88.1	88.7	88.7	89.9	93.7

ると見てよい。東京圏は横這いであるが、大阪圏は低落の方向にあることが東と西の状況を代表しているように思える。62年度の急上昇は近畿を除く全地方の水準上昇によっていることも注目すべき条件であろう。この動きを明確にするのが中都市の状況である。上記の62年度の50万以上の東の突出が、東北と東海での高位化として示され、関東も全国水準を保つことで東の高位を確実なものとしている。西の低落は近畿の低下に象徴的に示される。47年度に104.9と118.1という指数でその関係を示す東海と近畿の状況が、62年度には123.0と77.9の対応となったことは信じがたい変化でもある。中都市に比して小都市の動きは無風とも言いたい推移である。この中での特色を求め

第126表 1人当り都市普通建設事業費推移(8) (地方別, 一般都市) (単位: 円, %)

昭和年度		58	59	60	61	62	(指 数)				
							58	59	60	61	62
地 域											
全 国		55,978	55,313	55,355	55,932	60,598	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	68,192	63,346	63,468	63,514	70,112	121.8	114.5	114.7	113.6	115.7
	東北	56,936	55,292	51,559	51,907	62,862	101.7	87.3	93.1	92.8	103.7
	関東	55,934	52,997	51,882	54,740	57,772	96.3	95.8	93.7	97.9	95.3
	北陸	61,661	64,056	60,048	59,317	63,658	110.2	101.1	108.5	106.1	105.0
	東海	58,402	60,659	63,142	64,378	70,665	104.3	109.7	114.1	115.1	116.6
	計	57,194	56,841	56,041	57,632	62,874	102.2	102.8	101.2	103.0	103.8
西 日 本	近畿	52,181	49,633	49,619	48,214	48,885	93.2	89.7	89.6	86.2	80.7
	中国	52,260	51,753	52,784	55,235	61,809	93.4	93.6	95.4	98.8	102.0
	四国	65,618	61,950	64,965	65,128	70,632	117.2	97.8	117.4	116.4	116.6
	九州	53,937	55,439	58,692	55,574	61,811	96.4	100.2	106.0	99.4	102.0
	計	54,038	52,869	54,254	53,183	56,868	96.5	95.6	98.0	95.1	93.8
(東京圏)	51,596	51,215	49,777	52,165	55,228	92.2	92.6	89.9	93.3	91.1	
(大阪圏)	51,044	47,716	48,295	46,199	47,269	91.2	86.3	87.2	82.6	78.0	

第127表 1人当り都市普通建設事業費推移(9) (地方別, 中都市) (単位: 円, %)

昭和年度		58	59	60	61	62	(指 数)				
							58	59	60	61	62
地 域											
全 国		53,048	51,968	52,508	53,559	58,554	100	100	100	100	100
東 日 本	北海道	57,521	53,944	53,042	53,070	56,005	108.4	103.8	101.0	99.1	95.6
	東北	55,868	52,481	49,029	51,032	64,251	105.3	101.0	93.4	95.3	109.7
	関東	53,637	52,523	52,325	55,809	58,818	101.1	101.1	99.7	104.2	100.5
	北陸	59,028	60,322	57,387	56,891	59,387	111.3	116.1	109.3	106.2	101.4
	東海	54,671	57,037	61,671	63,198	72,017	103.1	109.8	117.5	118.0	123.0
	計	55,019	54,315	54,449	56,808	62,399	103.7	104.5	103.7	106.1	106.6
西 日 本	近畿	49,363	46,164	44,276	44,067	45,637	93.1	88.8	84.3	82.3	77.9
	中国	47,969	46,373	49,356	50,583	57,391	90.4	89.2	94.0	94.4	98.0
	四国	64,676	58,939	64,080	61,740	65,025	121.9	113.4	122.0	115.3	111.1
	九州	46,302	49,332	54,371	49,871	57,154	87.3	94.9	103.5	93.1	97.6
	計	49,844	48,134	49,344	48,194	52,118	94.0	92.6	94.0	90.0	89.0
(東京圏)	51,341	50,868	50,362	53,457	56,413	96.8	97.9	95.9	99.8	96.3	
(大阪圏)	48,975	44,863	43,262	42,907	44,205	92.3	86.3	82.4	80.1	75.5	

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第128表 1人当り都市普通建設事業費推移(10) (地方別, 小都市)

(単位: 円, %)

地 域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指 数)				
							58	59	60	61	62
全 国		61,402	61,641	60,793	60,517	64,645	100	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	86,681	79,638	81,534	81,651	94,778	141.2	129.2	134.1	134.9	146.6
	東 北	58,601	59,697	55,549	53,295	60,623	95.4	96.9	91.4	88.1	93.8
	関 東	54,666	53,733	50,724	51,925	54,839	89.0	87.2	83.4	85.8	84.8
	北 陸	65,013	68,622	63,314	62,304	68,940	105.9	111.3	104.1	103.0	106.6
	東 海	64,403	66,463	65,502	66,353	68,402	104.9	107.8	107.7	109.6	105.8
	計	61,305	61,731	59,135	59,261	63,842	99.8	100.1	97.3	97.9	98.8
西 日 本	近 畿	59,178	58,598	64,020	59,390	57,857	96.4	95.1	105.3	98.1	89.5
	中 国	60,567	62,210	59,482	64,371	70,524	98.6	100.9	97.8	106.4	109.1
	四 国	67,046	66,531	66,317	70,337	79,322	109.2	107.9	109.1	116.2	122.7
	九 州	62,636	62,413	62,643	62,106	67,147	102.0	101.3	104.7	102.6	103.9
	計	61,553	61,503	63,380	62,471	65,885	100.2	99.8	104.3	103.2	101.9
(東 京 圏 大 阪 圏)		52,320	52,274	47,995	48,130	51,654	85.2	84.8	78.9	79.5	79.8
		56,959	56,277	64,202	56,596	57,235	92.8	91.3	105.6	93.5	88.5

れば, 60年度の近畿の高位と62年度の四国の高位であろうか。

(E) 普通建設補助事業費の西高条件持続

普通建設事業費の説明の補足にこの補助事業費を加えるのは, 単なる補足ではなく, これまでの説明の方向を逆転させるための不可欠の条件と考えるからである。人件費, 扶助費以外は東高西低の関係にあり, 前記の普通建設事業費は構成比率も大きかったから, これまでの説明では西高東低型を論じようとする基本意図と矛盾することになりかねない。

普通建設事業費は補助事業費と単独事業費とに大別できる。国庫補助を得て実施される補助事業と地方公共団体の自前の財源で実施される単独事業とであって, 道府県の補助で実施される市町村の事業は単独事業に含まれる。この両者の差こそ問題であって, 国庫支出金による施策の高さこそが西高東低を決定すると考えてきたからである。普通建設事業費の東西関係と普通建

第129表 1人当り都市普通建設補助事業費推移(1)

(単位：円，%)

昭和年度	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
区分											
							(指 数)				
全 都 市	9,688	15,503	25,499	28,918	24,232	23,529	103.7	99.5	101.3	105.7	
{ 特別区	1,169	1,894	3,666	4,705	3,818	5,558	12.5	14.3	16.0	25.0	
{ 大都市	16,309	23,739	37,195	39,724	35,903	37,637	174.6	145.1	150.1	169.0	
{ 一般都市	9,340	15,429	25,633	29,336	23,916	22,270	100	100	100	100	
{ 中都市	9,182	14,428	23,387	26,165	20,797	19,617	98.3	91.2	87.0	88.1	
{ 小都市	9,571	17,030	29,558	35,013	29,814	27,522	102.5	115.3	124.7	123.6	
{ 5~10万	9,337	16,083	27,421	39,708	26,609	23,306	100.0	107.0	111.3	103.6	
{ 5万以下	9,859	18,421	32,957	32,213	35,634	35,449	105.6	128.6	149.0	159.2	
							(東 西 比 較)				
東 日 本	{ 大都市	12,448	17,594	29,691	31,971	29,164	29,990	76.3	79.8	81.2	79.7
	{ 一般都市	8,655	14,827	24,204	28,389	22,585	20,907	92.7	94.4	94.4	93.9
	{ 中都市	8,384	13,926	22,420	26,480	20,183	19,166	91.3	95.9	97.0	97.7
	{ 小都市	9,005	16,163	27,215	31,834	27,234	24,461	94.1	92.1	91.3	88.9
	{ 5~10万	8,830	15,180	24,700	28,758	23,659	21,464	94.6	90.1	88.9	89.0
	{ 5万以下	9,261	17,736	31,557	37,496	34,679	31,112	93.9	95.8	97.3	87.8
西 日 本	{ 大都市	19,702	29,395	44,367	46,504	41,872	44,657	120.8	119.3	116.6	118.7
	{ 一般都市	10,358	16,329	27,800	30,838	26,045	24,496	110.9	108.5	108.9	110.0
	{ 中都市	10,225	15,126	24,806	25,663	21,801	20,371	111.4	106.1	104.8	103.8
	{ 小都市	10,594	18,485	33,314	29,997	33,785	32,253	110.7	112.7	113.3	117.2
	{ 5~10万	10,475	17,748	32,158	38,135	31,742	26,597	112.2	117.3	119.3	119.7
{ 5万以下	10,703	19,426	34,931	42,707	36,818	40,606	108.6	106.0	103.6	114.6	

設補助事業費の東西関係との差異こそ注目すべきである。

すでに第30表で明らかにしたように、昭和50年台前半までの地方歳出増大が国庫支出金の収入比率を高める形で進められ、その後の歳出抑制が国庫支出金の収入比率激減で進められたと見るならば、普通建設事業費に占める補助事業費の比率が上昇と低下の過程をたどったことは容易に推量できる。昭和47年度から56年度までの全都市の一人当り額の伸びは3倍ともなり、普通建設事業費の伸びを上回るが、62年度にかけては18.6%減となる大きな転換で、ここでも普通建設事業費が9%増大したのとは著しい差である。一般都

都市財政構造分析統論 (2) (西村)

第130表 1人当り都市普通建設補助事業費推移(2) (地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

昭和年度 地域							(指 数)				
	47	50	53	56	59	62	47	53	59	62	
全 国	9,340	15,429	25,633	29,336	23,916	22,270	100	100	100	100	
東 日 本	北海道	11,512	19,673	35,259	43,573	35,909	34,566	123.3	137.6	150.1	155.2
	東北	8,504	14,614	26,122	30,400	25,072	26,711	91.0	101.9	104.8	119.9
	関東	8,358	15,232	21,295	24,953	18,605	16,055	89.5	83.1	77.8	72.1
	北陸	8,069	13,074	25,650	32,327	29,570	26,020	86.4	100.1	123.6	116.8
	東海	8,668	13,603	24,800	28,120	22,651	21,729	92.8	96.7	94.7	97.6
	計	8,655	14,827	24,204	28,389	22,585	20,907	92.7	94.4	94.4	93.9
西 日 本	近畿	11,819	17,943	25,799	27,272	22,144	18,465	126.5	100.6	92.6	82.9
	中国	9,452	14,948	27,036	28,941	24,783	23,961	101.2	105.5	103.6	107.6
	四国	9,268	14,546	37,526	37,614	31,435	32,884	99.2	126.9	131.4	147.7
	九州	9,202	15,515	29,843	35,244	31,075	31,473	98.5	116.4	129.9	141.3
	計	10,358	16,329	27,800	30,838	26,045	24,496	110.9	108.5	108.9	110.0
(東京圏)	8,218	15,619	20,390	23,764	17,122	13,087	88.0	79.5	71.7	58.8	
(大阪圏)	12,128	17,970	23,923	25,286	20,196	17,015	129.9	93.3	84.4	76.4	

市を軸に特別区と大都市の事情を見ると、特別区の補助事業費の水準は著しく低く、大都市の水準は高い。また一般都市を中都市と小都市の対比で見ると、小都市で中都市よりも補助事業費の比率が高く、それがさらに高まる過程でもある。そして5万以上都市と5万以下都市の対比では、後者の比率が高くそれがさらに高まる過程でもある。その上昇の程度は非常に大きい。47年度では一般都市で中都市と小都市、5万以上と5万以下いずれも支出水準に開きがないとも言えたが、62年度では5万以下は中都市の2倍にも達する開きとなっている。

重要視点の東西関係を見よう。結論は西高東低関係の持続であり、その条件確定の過程である。普通建設事業費の東西関係とは異なっているが、その差異がどこに顕著に示されるかを見ていきたい。まず大都市は西高東低の関係を強く保持する過程であり、普通建設事業費が西高の条件を緩める過程であったのとは際立った差異が見られる。一般都市についても西高東低関係の

第131表 1人当り都市普通建設補助事業費推移(3)

(単位：円，%)

昭和年度	58	59	60	61	62	58	59	60	61	62
区分										
						(指 数)				
全 都 市	25,293	24,232	23,322	22,550	23,529	101.2	101.3	102.8	103.3	105.7
{ 特別区	5,985	3,818	4,889	5,560	5,558	23.9	16.0	21.5	25.5	25.0
{ 大都市	36,410	35,903	35,203	34,095	37,637	145.6	150.1	155.1	156.3	169.0
{ 一般都市	25,001	23,916	22,698	21,820	22,270	100	100	100	100	100
{ 中都市	22,238	20,797	19,571	18,957	19,617	88.9	87.0	86.2	86.9	88.1
{ 小都市	30,117	29,814	28,671	27,352	27,522	120.5	124.7	126.3	125.4	123.6
{ 5~10万	27,633	26,609	25,385	23,965	23,306	110.5	111.3	111.8	109.8	103.6
{ 5万以下	34,555	36,634	34,815	33,762	35,449	138.2	149.0	153.4	154.7	159.2
						(東 西 比 較)				
東 日 本										
{ 大都市	30,387	29,164	28,434	28,097	29,990	83.5	81.2	80.8	82.4	79.7
{ 一般都市	23,655	22,585	20,843	20,023	20,907	94.6	94.4	91.8	91.8	93.9
{ 中都市	21,433	20,183	18,650	18,149	19,166	96.4	97.0	95.3	95.7	97.7
{ 小都市	27,856	27,234	25,103	23,731	24,461	92.5	91.3	87.6	86.8	88.9
{ 5~10万	25,484	23,659	22,049	21,185	21,464	92.2	88.9	86.9	88.4	89.0
{ 5万以下	32,625	34,674	31,724	29,430	31,112	94.4	97.3	91.1	87.2	87.8
西 日 本										
{ 大都市	41,772	41,872	41,252	39,436	44,657	114.7	116.6	117.2	115.7	118.7
{ 一般都市	27,148	26,045	25,677	24,726	24,496	108.6	108.9	113.1	113.3	110.0
{ 中都市	23,548	21,801	21,071	20,293	20,371	105.9	104.8	107.7	107.0	103.8
{ 小都市	33,600	33,785	34,237	32,981	32,253	111.6	113.3	119.4	120.6	117.2
{ 5~10万	31,317	31,742	31,318	28,969	26,597	113.3	119.3	123.4	120.9	119.7
{ 5万以下	37,026	36,818	38,626	38,920	40,606	107.2	103.6	110.9	115.3	114.6

持続であって、普通建設事業費が西高東低から東高西低への転換過程であったのとは全く異なった動きである。その西高東低の程度も当初から普通建設事業費より著しく大きかった。中都市では西高東低の開きを緩めてはいるが、普通建設事業費が明確な東高の条件を作る過程であったのに対比すれば、この緩みも強調すべき条件ではなくなる。小都市については西高東低の関係は顕著であり、さらにそれを強める過程であって、62年度の88.9対117.2という東西関係は西が東を32%も上回る高位にあることを示している。普通建設事業費の小都市の東西関係がほぼバランスしていたのとは全く無縁とも言い

都市財政構造分析統論(2)(西村)

第132表 1人当り都市普通建設補助事業費推移(4)(地方別, 一般都市)

(単位: 円, %)

地域	昭和年度	58	59	60	61	62	(指 数)				
							58	59	60	61	62
全 国		25,001	23,916	22,698	21,820	22,270	100	100	100	100	100
東 日 本	北 海 道	38,697	35,909	34,016	31,869	34,566	154.8	150.1	149.9	146.1	155.2
	東 北	26,190	25,702	24,215	23,926	26,711	104.8	104.8	106.7	109.6	119.9
	関 東	19,956	18,605	16,162	16,016	16,055	79.8	77.8	71.2	73.4	72.1
	北 陸	29,440	29,570	27,876	24,677	26,020	117.8	123.6	122.8	113.1	116.8
	東 海	22,817	22,651	21,727	20,773	21,729	91.3	94.7	95.7	95.2	97.6
	計	23,655	22,585	20,843	20,023	20,907	94.6	94.4	91.8	91.8	93.9
西 日 本	近 畿	25,105	22,144	20,922	20,424	18,465	100.4	92.6	92.2	93.6	82.9
	中 国	22,562	24,783	23,772	22,455	23,961	90.2	103.6	104.7	102.9	107.6
	四 国	33,272	31,435	31,386	31,764	32,884	133.1	131.4	138.3	145.6	147.7
	九 州	31,027	31,075	32,489	30,180	31,473	124.1	129.9	143.1	138.3	141.3
	計	27,148	26,045	25,677	24,726	24,496	108.6	108.0	113.1	113.3	110.0
(東 京 圏 大 阪 圏)	東 京 圏	17,925	17,122	14,619	14,002	13,087	71.7	71.7	64.4	64.2	58.8
	大 阪 圏	23,518	20,196	19,677	18,943	17,015	94.1	84.4	86.7	86.8	76.4

たい状況である。

中都市の内訳説明を省略して地方別状況を見ることにしよう。一般都市で東低条件の持続は北海道, 東北, 北陸の水準上昇の間に関東の水準低落が続いたことにあり, 極端に地方間格差が作られた過程でもある。西高の条件の持続も四国, 九州の水準上昇過程の間に近畿の低落が続いた結果ではあるが, 関東の水準が当初から近畿よりも低く, 終始低位にあることと, 他の地方についても北海道を除けば東が西よりも低位での展開であった結果が, 西高東低条件の保持となった。低位の東京圏と大阪圏について見ても62年度で東京圏は大阪圏よりなお23%も低い水準である。

近時の状況理解のためにここでも58年度以降の毎年度の推移を見よう。補助事業費は61年度まで続いて低減した後で62年度に幾分回復しているが, 59年度の水準にまでは戻っていない。またこの62年度の回復は大都市で明確に示されたものであって, 一般都市では回復というほどのものでなく, 58年度

以降の低落が一息したという程度のものである。水準低下への動きと見れば中都市と小都市に差異はない。支出水準で小都市が中都市よりも高いという条件の差があるだけである。しかし5万以上と5万以下に分けると、ここでは5万以下がその水準を保持した経過であるのに対して5万以上がその水準を下げ続けた推移であるという明確な差がある。

この条件のもとでの東西関係を見ると、大都市は西高東低の格差条件がますます強まる過程を示し、一般都市についても西高の条件を強める動きの中で62年度は突如東の反発が示されている。この突出は中都市の事情によるものであるが、傾向的状況としては中都市よりも小都市で西高東低の関係が強まる。

最後に地方別の状況検討を加えよう。一般都市については、東の各地方はほぼ同じ条件で推移したと言えるが、西の各地方はかなり動いている。中国、四国、九州の上昇と近畿の大きな低落とがある。近畿は62年度の反発からも外された。

(1989. 11. 25)